



2016. November
第15・16号合併
(スペシャル号)

一般社団法人日本演出者協会 協会誌「ディー」

題字 千田是也

新劇の代表的演出家・千田是也氏の文字をロゴデザインに使用。
(資料提供/早稲田大学坪内博士記念演劇博物館)

特別対談

「通じ合えないのが言葉だけれど。」

橋爪 功 × 岩崎ひろみ

Contents ■■

- | | | |
|--|---------------------|---------------|
| ■特別対談 橋爪功 × 岩崎ひろみ 『通じ合えないのが言葉だけれど。』…… 2 | ■総会報告…… 22 | ■事業担当者名簿…… 22 |
| ■日本演出者協会の軌跡…… 6 | ■理事会報告…… 23 | ■在外研修報告…… 24 |
| ■若手演出家コンクール2015…… 8 | ■部会だより…… 24 | |
| ■日韓演劇作品交流プロジェクト“演劇でつながろう”…… 11 | ■各地域活動通信 被災地特集…… 25 | |
| ■若手演出家コンクール2014最優秀賞受賞記念公演…… 11 | ■アンケート「演出者の仕事」…… 26 | |
| ■演劇大学(演出家・俳優養成セミナー)2015…… 12 | ■新入会員紹介…… 28 | ■退会・訃報…… 30 |
| ■日本の近代戯曲研修セミナー2015…… 16 | ■データに見る…… 31 | ■広報部員紹介…… 31 |
| ■国際演劇交流セミナー2015…… 18 | ■編集後記…… 32 | |

一般社団法人日本演出者協会誌「D」(ディー) 第15・16号合併(スペシャル号) 定価=無料 2016年11月1日発行 平成20年11月創刊(毎年2回発行)

【発行人】和田喜夫(理事長) 【編集人】秋葉由美子(広報部長)/篠崎光正 【編集委員】大西一郎/篠本賢一/三谷麻里子/緑川憲仁/栗原秀一
【インタビュー編集】鷺谷憲樹 【発行所】一般社団法人日本演出者協会 東京都新宿区西新宿6丁目12番30号芸能花伝舎3F(〒160-0023) 電話03-5909-3074
【編集・制作】一般社団法人日本演出者協会広報部協会誌「D」編集委員会 【題字】千田是也「Marionetto」より 【印刷所】有限会社一光堂印刷
【表紙デザイン】前嶋のの 【本文デザイン】鷺谷憲樹

演出家と俳優の役割はどのようなものなのか。たとえば演出家の立ち位置は「観客の代表」としてなのか、あるいはアーティストとして表現をする者なのか。

舞台と映像作品の両方で活躍している俳優の橋爪功氏と岩崎ひろみ氏に現代の舞台芸術のあり方を訊いた。橋爪氏は演劇集団円の代表を務めており、広い視野からの「意見をうかがうことができた。また岩崎ひろみさんは、聞き手である篠崎光正氏の演出した『アニー』において主演を務めたことがある。子役からの長いキャリアの持ち主である。

演出家の美意識みたいなものがある

橋爪 ■演出家はまあ、お客さんの代表ではないと思いますけどね。観客はもういっご別の要素として大きくあるから。僕は演出したくないからよくわからないですけど、…パイロットみたいなものですかね。

——ということは、演出家が「この船はハワイに行くぞ」というと、もうハワイに向かって進む。そのとき俳優としては、いかにハワイをおもしろくするかを考えていくと。

岩崎 ■私は、作品は演出家やディレクターのものだという認識なので、ひとつの駒になる気持ちです。小さいころは自分を出したい時期もありましたが、ひとつの駒で作品に参加してるつもりです。

——そのあたり、ベテランと若手はちよっと違いますよね。

橋爪 ■俳優としてですか。変わんないと思いますよ。彼女の言った通り、俳優は本当に駒ですから。脚本と演出家とお客さんと、その間に立つてうまく橋渡しすることしか、俳優の仕事ってないじゃないですか。それでいいと思うし。

——演出の魅力や刺激的だなと思うことはありますか。

橋爪 ■あんまり考えたことないんですけどね。お客さんの前に持ち出すというか、お渡しするときに、なるだけ雑物が入らないようにする。そのために、演出家の台本に対する読み込みとか、そういうことを含めて注意深く聞いていくことしかないんじゃないですかね。僕もそういう俳優なんで、俳優としてあらためてなにか持ち出すってのも嫌いなので。そういうのをうまく引き出す演出家さんの芝居は、わりかしやってみて楽です。同じ方向を向いているわけだから。ただ演出が先行して戯曲の解釈とかをしてくるとなると、めんどくせえなと(笑)。

——たとえば、具体的な名前を出しちゃうとなんですけど、野田秀樹氏のNODAMAPのように、演出家が一緒に出演してるところの演出ってどうですか。

一般社団法人日本演出家協会
広報誌「D」
特別対談

通じ合えないのが 言葉だけけれど。

今回初めて、演出家を交えずに俳優同士での対談を試みた。ベテランと若手、年代の異なる俳優からも見る演出家の姿とは。映像と舞台、両方の足場を知る俳優だから考えられる

「演劇」の可能性と未来について



岩崎ひろみ
女優

俳優
橋爪功

写真：moco.

橋爪 ■僕は野田が好きなので、まったくなんの疑問も抱くことないんですけど。彼の芝居は大きな「演劇」の中のひとつであって。実際問題、やってもよくわからないところがあるんです。でもそれは野田の責任ですから。まずかつたらアイツのせいだし。そういうのが極端によく分る例だから。

岩崎 ■私、篠崎先生に中学校1年から3年とミュージカルで一緒にさせていた。先生は、子供だからということもあるんですけど、「右足から2歩、階段を2段で降りなさい」と演出をつける方で。その教えを連続で受けたあとで、野田さんだったんです。高校1年で次の年です。まったく指示をされないとというのがもう不安で使わなくて。野田さんも初めて15歳の高校生を使うということ、あまりコミュニケーションもよく取れず。自分の中ではもう、野田さんにお会いしたら土下座して謝りたいと思うくらい。お芝居をしていて初めて楽しくなりました。やらなきゃいけないことや与えられていることが理解できなくて「好きにやってみよう」ということが15歳にして寝られないくらいストレスで。いま考えると子供だったな、いろいろ対策もとれただろうし解決法もあっただろうにと思うんですけど、しばらくトラウマでした。

橋爪 ■新人さんは大変かもね。野田の芝居って。夢の遊眠社やっているところは、自分の戯曲ですべてを進行していく作り方だったし。ある程度ベテランの俳優さんを使うようになってきてからは、余計稽古場では細かいダメ出しはししないでしょ。キャストイングの段階で決まってきたら、「アイツは楽しんで」って(笑)。

岩崎 ■観る方も安心感を持って観に行きますよね。

ら変だけど、ステージ上ってそういうものがあるんですよ。うまく言えないけど、演出家の美意識みたいなものがある。どうしてもこの台詞はこっちを向いて喋って欲しいみたいな細かいことも含めて、そういうふうにしてほしいという気持ちはわからないでもないけど、あんまりそれががんじがらめにされてもね。俺なんかは、たとえば「こうしなさい」と言われたら、たぶんその通りにすると思うんだよ。別に痛痒も感じないというか、そういうふうによつてみたいんだと思うから。お客さんが入ってきた時点で、それが吉と出るか凶と出るかは自ずと決まってくるから。良くない場合は「演出家のバカ野郎」と言っちゃえばいいんで(笑)。良ければ自分が良かった、というね(笑)。

——たとえばキャラクターを作っていく時に、演出家の意図もありますよね。それをうまく自分の中でイメージを合わせていくという作業は、始めに決めていきますか、後半で決めていきますか。

橋爪 ■ 台本もらったときに、いい意味でね、なにかひっかかるものがあると、それはね、準備しますよ、ある程度は。声出したり動いたりということはしないけれども。キャラクターを作るときにその準備は必要だと思うんですよ。その芝居のときに準備するか、それ以前に人間を見て観察してる。実際に動き出したときにキャラクターとしていろんなものが降りたり出たりしてくるかどうかは、普段の準備だと思うので。だからといってどういふ勉強をしたらいいかって、わからねえしな。人間に対して広く浅くおもしろがってる。そういう窓口は持ってた気がしないでもない。

映像は無限に表現できてしまう

橋爪 ■ 僕はなんで演出をやらないのかというと、そんな大変なことをしたくないという(笑)。だって取捨選択しなきゃいけないでしょ、演出って。諦めることが多いんじゃないですか。

——それが舞台演劇に行こうとする人が減っている理由だと思うんですね。これがたとえばアニメーションだと……。

岩崎 ■ 無限でもんね。
——そう。作りのほうは、作家や監督は、自分がやりたいことを無限に表せるんですよ。僕は逆に無限にならない人間のほうがおもしろいと思うんですけど。でもいまはそっち側が多いですよ。

演劇によって与えられる衝撃という部分では

お金では買えないものがある。

【岩崎ひろみ】

岩崎 ■ 主人が劇団☆新感線というところの劇団員なんですけど。もともと映画を作ってたかたという流れからだんだん芝居自体の映像化がすごくなってきた。先日も観てきたんですけど、ほぼ映画でした。とても迫力があって楽しめました。セットはすべて後ろのLEDに映像が流れて。子供たちもすごく喜んで。あそこは学生割引みたいなのをやっているんで、3000円くらいで2階席の一番端っこの席で。私のいとこなんかは学生なのでお小遣いを持って舞台に行ってますね。そうやってなにかひとつ楽しいと思うと、他の劇団はどうなんだろうと興味を持つみたいで。私のいとこのなには、私のときの芝居はぜんぜん観てなくて、新感線に出会ってからは小さい劇場の舞台も観るようになって。入り口としてはいいのかもしれないですね。じっくりとした芝居はまだ観たことないと思うんですけど。

——橋爪さん、いま仕事の分量は映像は八割ぐらいですか。

橋爪 ■ どうなんだろう。芝居かかると2か月くらいやりますから。でも半分ってことはないですね。映像のほうが圧倒的に多いですね。

——舞台のほうはしんどくなりますか。

橋爪 ■ ぜんぜん。年に1回はやらなきゃいけないと思ってる。できたらやりたいんだけど。劇団やってるんで「外貨」を稼がないといけないから(笑)。まあ、映像のおもしろさもあるんで、そのところは、いいかげんな俳優をやってみようかと思ってますね。舞台はね、いま、なんか、しゃべる言葉が疲弊しているというか。疲弊したのか無くなってしまったのかわかりませんが(笑)。しゃべってみたいなあという台詞がかつてはあった気がするんですけど、いまはほとんど無いですね。だから2時間の芝居をやったとしても、この台詞しゃべりたいと思うことがほとんどない。それくらい、言葉が日常に近づいたというのか。

岩崎 ■ たぶん、テレビを観ているほうも、最近テロップで言葉が出るので、耳で聞くのが苦手なのか、すごく簡単に聞いてわかりやすいフレーズばかりになってる感じがするんですよ。

橋爪 ■ ただ、文化そのものはね。本を読んでも方もたくさんいらっしゃるし、いろんな勉強して、おもしろいなって方もたくさんいらっしゃる。その人たちが劇場に來ないって話だけで。その人たちが聞くに耐える、観るに耐える芝居が、相対的に減っているのかもしれないですね。もともと日本の新劇って相当マイナーな芸術で

対談：通じ合えないのが言葉だけれど。 橋爪功×岩崎ひろみ

はあったけども、ここへ来てそのマイナーぶりがもつと顕著になりつつあるのかな。だからあんまりね、舞台に対する期待は無いんですけどね。

「ちよつと試してみたい」と思う台詞がない

——音楽の世界なんかは、CDがどんどん売上が下がってきて、でもライブのほうは増えている。

橋爪 ■ それはね興行でしょ、結局ね。演劇の場合、興行的にうまくいっているところもあれば、そうじゃないところもある。客が集まらないと話にならない、というのは確かだけれど、同時に舞台芸術には興行だけに流されない骨太なものが必要だと僕は思うんですよ。かつて新しい「台詞劇」を目指した新劇の歴史の中から、たくさんのが才能が、演劇に魅力的な「言葉」を持ち込んだ。けれど単なる日常語じゃなかった気がするのよ。「ああ、俺もちよつと試してみたいな」という台詞がね。あったんだよ。翻訳ものに限らず、日本の古典でもさ、しち面倒くさい日本語なんだけど、しゃべるとなにか気持ちいいっていう……(笑)。やはり台詞も芝居自体も、トータルで言うと、先細りしているのかなあ。そこが不満だっていうお客さんも多いんじゃないかね。だから俳優も大変なんですよ。いまはそんな「気が行く」ような台詞をしゃべれないから。そんな脚本がないから。たまに翻訳ものやってみたいなと思ってるんですけど。本当を言えば翻訳ものなんかやる必要ないんですよ。日本人なんだから。映画やドラマなんかも、ヨーロッパは台詞がまだまだ頼もしいんですよ。そういう文化なんですかね、言葉に対する。

岩崎 ■ 私も最近観たのでおもしろかったのは翻訳ものでした。

——すると若手としても、言葉には少し物足りない？

岩崎 ■ なんだらう。ライブなので舞台は生で見られるんですけど、聴いて、言葉で広がる世界とかが……。こないだ「アルカディア」を観てきたんですけど、流れに一生懸命ついていって、自分もその世界に入っていく。それで終わったときには席を立ちたくないくらい充実感というか、演者ひとりひとりにお礼を言いたいような気持ちになったんです。それってやっぱり舞台じゃないと得られないこと、映画や映像では感じられないものだし。そういう気持ちの高揚を感じられるのって演劇以外にはないと思うんですよ。本を読んで自分の中で想像がふくらんで楽しいというのとはあると思うんですよ。でも与えられる衝撃という部分では、お金では買えないものがある。そういうものに会おうとやっぱ自分も出演したいと思うし、あそこいたら自分はどういう役だったんだらう、どのように振る舞ったんだらう、どういうふうに出演をされたんだらう

うと考えるのはすごく幸せなことだと思って。最初に観に行こうとしたときに、舞台上に詳しい人からは「難解だよ」とか、ただ単純に楽しめるものではないと言われてたんですけど。そういう否定的というか、先回りした口コミ情報によってみんなの足が遠のいていく気がして。心から高揚するものに触れてこそ自分が成長できる機会だという気がします。こうやっていくから私が言っても行かない人は行かないでしょうね。でも本当に行つて欲しいんですよ。

通じ合わない言葉を通じさせるための言葉

橋爪 ■もともと言葉って通じ合わないけど。同じことをしゃべっても話半分も聞いてないからね(笑)。言葉って通じないものだけど、通じさせるためには言葉が必要だから。そういう舞台でありたいとずっと思ってるんですけどね。

——いいですね、その言葉、いただきますよ(笑)。

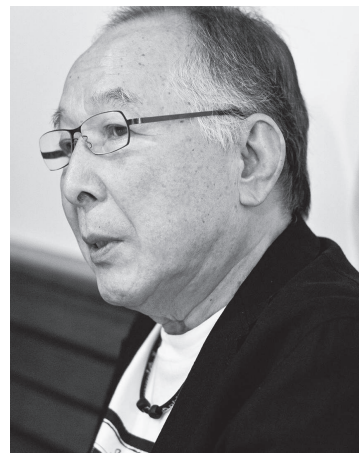
岩崎 ■言いたい台詞です(笑)。

橋爪 ■考えるのも言葉だし、理屈してるのも言葉だし、あとで反省するのも言葉じゃない。そういう磁場が、俳優もスタッフも含めてあると、多少楽ですよ。ないものねだりみたいになっちゃうけど、いま朝日新聞で夏目漱石の『吾輩は猫である』の連載をやってるんだけど、僕はこんなにおもしろかったかと思うんだよ。でもこれいまでは読めるんだらうかと思うんだよ。小説でもそうですから、まして舞台になると。現実的に生きていく世界がさ、言葉が少なくなっている世界だから。単にイメージの中に入っちゃえばいいみたいな世界だから。もう役者は減びるんじゃないかと(笑)。みんなそれで一人芝居をする(笑)。

作家の時代、演出家の時代、俳優の時代

橋爪 ■演出家でも、勉強する人はホントに勉強してますよね。日本語に関してはね。そういう人は違ったことを言えるんじゃないですかね。そういう人がいる限りは大丈夫だと思っんですけど。やっぱりなんだろう、俳優かな。これから必要なのは、ある程度の水準を持った俳優さん。

——ほんとそうかもしれません。いままで作家の時代があり、演出



橋爪功 (はしづめ・いさお) — 俳優。大阪府出身。文学座、劇団雲を経て、演劇集団円設立に参加、2006年代表就任。主な出演作品は、舞台『シラノ・ド・ベルジュラック』『レインマン』、映画『東京家族』、TV『京都迷宮案内』『最強のふたり』他多数。

家の時代があつて。いま俳優の時代になつてくる気がしますね。人間の人生全体を醸し出すのは、役者の作業でしかできないですよ。

橋爪 ■大変でしょ、演出してると。『夏の夜の夢』のボトムじゃないけど「オレがこの役もその役もやる」ってなるじゃない、森の中で。ああいうふうになっちゃう。

岩崎 ■「オレがいつばいいたら」って。

——逆に、演出家を育てるにはなにが必要ですか。

橋爪 ■演出家には芝居をいっぱい観てほしいですね。古典芸能も含めて。日本の話芸っていろいろあるでしょ。歌舞伎も能狂言も落語もあるし。いまや講芸ってアレかもしれないけど、日本語のしゃべくりの心地よさみたいなのがまだ他にもあると思うんで、ウチの劇団の演出家にもときどき言いますけど、たくさん観てほしい。と同時に、できれば俳優さんもうそういうのを観てほしいと思うんだけど、なんか、いま現代劇つてそこだけに独立してるよね。テレビのホームドラマ観てるのと同じじゃないかよって芝居じゃないですか。でまた今はどこでも芝居できるから予備軍がいっぱいいて。それはいいっちゃいいんだけど。でもそれやってたら、ねえ。大学生が観ないってのは問題ですよ。向こうだと、ヨーロッパだとありえないじゃない。

——そういうえば昔、文学座は顔合わせの時に作家や演出家が……

橋爪 ■ああ、僕のとときはまだ残ってました。本読みというのは作家か、または演出家が本読みをする。俳優は声を出さない。

岩崎 ■ええー？

現実的に生きていく世界がさ、言葉が少なくなっている

世界だから。もう役者は減びるんじゃないかと。

【橋爪功】

対談：通じ合えないのが言葉だけれど。 橋爪功×岩崎ひろみ

橋爪 ■読んで、聞かせて。これが本読みなの。

——役者はすごくおもしろいと思うんです。書いた人や演出家が音声化するから。ドキドキしますよね、あれ。

橋爪 ■僕らまだペーペーだから台詞なんかもらってないじゃないですか。だから非常に自由な気持ちで聞けるじゃない。けっこう固まっているけど(笑)。おもしろかったですよ。

岩崎 ■口立てみたいなものでもなんね。

橋爪 ■そうですね。全部読まないまでも「ここはね」って言って読む演出家はしばらく残ってましたよ。僕は岩田豊雄さんのは聞いたことある。岸田國士さんと久保田万太郎さんは残念ながら……。まあでも、勉強になるというか、おもしろかったですよ。

自分が生きていくところの根っこを知る

橋爪 ■俳優って演出家と一緒に、観客と作品との橋渡しをするだけだから、通訊みたいなものですよ。それがいちばん大変なの。それは、しょうがないよね。それくらいは役者も苦労しないとね(笑)。意外と俳優もいろいろ考えてるんですよ、どこの現場行つてもね。願わくばうまくリードしてもらえとありがたいよね。だって、これ絶対違うと思うたら降りちゃえばいいんだもんね(笑)。いままで降りたことないからあれだけど。まあでもおもしろいと思うんだけどね、演出の仕事。映像も監督おもしろいというもの。

岩崎 ■ほんとに、演出の方と作品に参加してるつもりなので、言われたとおりにやりたい。でも言われたとおりにできなかったら、ごめんさい。でも「選んだのはそちらです」みたいな(笑)。

——そこが強いよね。キャストティングしたのお前だろつて。

岩崎 ■そう、そうです。一生懸命やりますけれど、できなかったらごめんさいというの。

橋爪 ■でも、演出によって赤を黒という、そこまで極端なことをできるのは演出家ですから、そこを役者が納得しちゃうとすごくおもしろい舞台ができあがる可能性がありますよね。ありきたりにやってるんだつたらありきたりの反応しか役者から返ってこないと思うけど、演出家が深いところまで降りていけば、俳優にとつてはある種ありがたいというか、そういうんだつたらなにもいいなと思えますよ。

岩崎 ■私、中学校1年のときに篠崎先生の『アニー』でアニーやっただけですけど、正直、それまで3歳から子役始めて舞台を踏んできて、初めてこてんぱんに叱られて、ずっと商業演劇ばっかりやってきて、お涙頂戴のお芝居を大の得意だと自負しながら『アニー』に出て、先生に「大人を馬鹿にするな」とさんざん教えこまれて、そ

この稽古をした3か月間が、その後の私の演劇人生を決めたくらいのもので、私の根本を作ってくれたのが先生で。

橋爪 興行をする側というのかな。プロデューサーとか劇団とか、会社という人たちが「お客はこういうもんだ」と思ってるところはダメなのよ。その人たちがお客に対して、リスベクトしてないとお客さんを怖いと思えないし。興行する側のほうがお客さんに対してビビッドに反応していれば、そこに出ている俳優が「お涙頂戴ね」って安心したような磁場はできないはずなんだけど、そういうのはけっこう今でもあると思うんだよね。お金をいただいてモノをつくる側の責任だと思ふよ。その人たちが本当に無限の可能性をお客さんの中に抱いていれば、当然そこに参加する俳優も演出家も、そこそこを理解して上質な演劇を目指そうとするじゃないですか。僕には少なかつた、たぶんね。あつたんでしょ。おんぶに抱っこで情性で流れてたというか。

岩崎 ある程度お客が入れればいいと。

橋爪 劇場に若いのがつめかけてきて革命でも起こしてやろうかみたいな、熱い日本じゃなかつたからね。ちよつといっぺんあつたけどね。六〇年代や七〇年代にね。それくらい力を持てるものだから。演劇って恐ろしいものだから。僕はあのへんノンポリでね。唐十郎が出てきたり清水邦夫さんが出てきた時に「なんだよチキシヨウ」と思ってたほうだから、失敗したなど。あつちの方に行つてりやよかつた。寺山さんもそうだし、あのあとつかこうへいさんなんかも出てきたりね。熱かつたんだよね。演劇に対して激しい物を持つた人も少なくなつてきたのかな。そういう時代があつたということ、俳優志望の人たちはあまり知らないんですよ。勉強もしないし。

岩崎 箱入りというか。

橋爪 というかにも興味ないのよ。閉ざしてるから。少なくとも現代劇をやるという人は、新劇というのから始まつて、こういう先輩がいたんだということを知るべきだと思ふし、こういう芝居をやつてたかを知るべきだと思ふ。つまり、いま自分が生きてるところの根っこじゃない。ちよつと前に仲谷昇さんとか岸田今日子さんとか亡くなつたんだけど、いまウチ（演劇集団円）に入つてくるやつが、岸田今日子知らないんですよ。もちろん芥川比呂志さんなんて及ばず（笑）。

——いま演劇の大学でも、野田秀樹の名前を知らないのがいっぱいいるんですよ。ホントに驚きます。

岩崎 なにを学びに行つてるんですよ！

橋爪 そういふの聞くとやつぱりもうダメだなと思つたりする（笑）。



岩崎ひろみ（いわさき・ひろみ）——女優。生後数ヶ月で、テレビドラマにて子役デビューし、三歳の時に自らの意思で劇団若草に入る。映画『木村家の人びと』で映画デビューし、「天才子役」と話題になる。ミュージカル『アニー』で主役を務め、NHK連続テレビ小説『ふたりっ子』では双子のヒロインの一人を演じ、全国的に知られる女優となる。二児の母。最近では映画や舞台のほか、バラエティ番組にも数多く出演。

遊ばせとかなないと、いい色の金魚は出てこない

——年代の違いに関してですが、たとえば会社員なら部長や課長と役職で並んでくる。舞台の場合はいろんな人がいて年齢も違つてきますよね。キャストイングで工夫したりいろんなことをしますけど、役者としてはどう考えますか。平等に、公平にという感じですか。

橋爪 そうですね、あまり考えないですね。関係ないですもの。うまきやいいし。もうダメだと思つたら見放しますもん。かまつたらねえややつてなつちやいますし。まあ若い人はみんな普通の芝居はうまいんで、そんなことあまりないんですけど。ただ、キャバがない。なんかダメ出しでドーンつてされたらどうしていいかわからない。それでバラバラになつちやうつて可能性はありますけど。それは若いだけでなく、30代40代でもいますよね。自分で作つていっぺん壊されちやうと「なんで？」つて。監督の悪口を言い出したりね。でもさ、役者も結果的には、黒の台詞を白で言えるからね。それくらいなんとでもなるじゃないですか。それを決めてかかつちやうと変えられなくなつちやう。

岩崎 私は自分を信用していないので、自分が良いと思つた芝居をいちおう見ていただいて、違つて言われたらハイと。結局そう見えてなかつた、結果的に見てくださった方が違つたと思つたということを素直に受け入れます。もうそれだけです。自分が良かれと思つた芝居は必ずしも正解ではない。

橋爪 あと教育だね。大事なんだよね、俳優としてスタートする前の教育というか。文学であつたり音楽であつたりいろんなことあると思うんだけど、やつぱり磁場がない。なんかいいことないか子猫ちゃんみたいな感じに入つてくるから（笑）。いまや、役者よりも声優さんになりたいって子がウチに入つてくるよ。「声優さんになりたいの？ ああそう」つて。まあ月謝もらつてるからね。

対談：通じ合えないのが言葉だけれど。 橋爪功×岩崎ひろみ

——声優のほうがいい仕事多いですかね。

橋爪 そう、そうなんです。ホント役者、仕事ないから。大変だよ。もう少し、寄付が欲しいよね。いろんなところから寄付がないと。この世界金食い虫だから。自治体でもなんでもいいんだけど。うちの舞台監督やつたやつが、定職欲しいから京都の大学へ先生で行くつてんでしばらく休ませてくれつて。そしたら大学ではほとんど政治がらみで動くから、なるべく早く辞めさせて次の人になる。あと2、3年見ればおもしろくなるよつて言つても通用しないんだつて。だからもう帰りたいつて言つてますよ。芸術関係の大学でもそうだから。時間かけてお金をかけて遊ばせとかないと、いい色の金魚はなかなか出てこないんだよ（笑）。劇場だけでは食えないもんね。大変な時代ですよ。

——世界的にも演劇は、こう……。興行的にも当たらないからリハビリ作品をやるとか。プロードウェイなんかまさにそうですよ。**橋爪** こないだドイツのシラッハつて作家の朗読をやつただけど、新作の「Taron」つていうの。ドイツではあちこちでやるんだけど、三十何か所せんぶ演出家が違つたんだよ。その劇場付きの俳優がいるから。そんなことができるんだよね。当然一公演多くて二公演。そんな赤字になるに決まつてるんだよ。でもそれはドイツの各都市で手持ちの劇団があつて、お金出すからそういうことができる。お客さんにとつちやすいことだよ。旅客機を乗つ取つたテロリストのグループがいて、その旅客機を空軍のパイロットが撃墜しちやう。でないと7万人のサッカースタジアムに墜落しちやうと。最終的にね、そのパイロットが有罪か無罪かをお客に判断させるの。

岩崎 わあ、参加型ですか。

橋爪 それどうしてもやりたいつていうプロデューサーがいたんで、でも芝居にはできないよつて言つたんです。人集めるのも大変だし。朗読でぜんぶひとりやちやうつて。6役ぜんぶひとりやつたの。ドイツでは六・四で無罪。俺と小曾根真さんつてすごいピアニストとふたりでやつたんですよ。東京だと三・七で有罪で。登場人物のやり方によつては……、別にミスリードするわけじゃないけど。「日本も1回くらいは無罪にしたいな」つて小曾根くんと言つて、関西ではまあ最後に相当追つたんだけど、やつぱり有罪。**岩崎** そこに役者の手腕があるわけですね。ミスリードじゃなく。**橋爪** できなくはない。やつちやいけないんだけど（笑）。舞台上で白が黒に。こんなのは紙一重だからね。

岩崎 そう考えると言葉つて怖いですね。

日本演出者協会の軌跡

新たな展開をめざして

和田喜夫

日本演出者協会は昨年2015年4月で設立55周年を迎えました。1960年に100余名の新劇の演出者によって「演出者の社会的・経済的・芸術的地位の確立」などをめざして発足しています。その年は日米新安保条約が締結され、またベトナム戦争が始まった激動の年でした。この55年の間にもさまざまな大きな出来事があり、その都度議論を交わし、さまざまな事業を行ってきました。協会も商業演劇、アングラ、小劇場の演出者に加わり、現在約600名の団体となっています。しかし当初の課題はまだ道半ばという段階です。経済中心の混迷の時代にあつて格差は広がり、責任者不在の不気味な不信の時代となっています。新たな社会を生むためには、世代やジャンルを超えた対話と行動の必要を強く感じています。

日本演出者協会略年譜

- 1960年(昭和35年)**
 - 演出者の地位向上、相互交流、演劇事業の実施を目的として創立する。
 - 初代理事長に村山知義、副理事長に千田是也、成井市郎。事務局長に松尾哲次を選出。後に事務局長は木村光一に交代。
 - ※その後一時的に休止状態になる。
- 1974年(昭和49年)**
 - ・日本演出者協会再発足を開く。
 - 理事長・村山知義、事務局長を西木一夫。(東京小劇場に事務局を置く)
 - ・会報第1号を発行する。
 - ・日本芸能演劇家団体協議会に加盟。
- 1975年(昭和50年)**
 - ・演出契約ならびに演出料についての規定を設ける。
 - 事務局長にふじたあさや着任。
 - ・事務局を新劇協議会に移転。事務作業を新劇協議会に委託。
- 1976年(昭和51年)**
 - ・八田元夫副理事長死去。
- 1977年(昭和52年)**
 - 村山知義理事長死去に伴い千田是也副理事長が理事長代行。
 - 第1代理事長に千田是也就任。副理事長に宇野重吉。事務局長にふじたあさや継続。
 - ・合同演劇講座スタート。
- 1978年(昭和53年)**
 - ・千田是也を学長に「夏の演劇大学」スタートする。清里清泉就任。
- 1982年(昭和57年)**
 - ・関西支部発足。
- 1986年(昭和61年)**
 - ・友好団体を組織し、香港・広州・上海・北京を訪問。
 - ・宇野重吉副理事長死去。
- 1987年(昭和62年)**
 - ・夏の演劇大学「劇体験・清里の夏」開催。
- 1988年(昭和63年)**
 - ・はじめての選挙による役員選出。
 - 千田是也理事長、事務局長にふじたあさやは継続。
 - ※これまで会員は新劇関係の演出者のみであったが、アングラの演劇人にも入会してもらう方針となる。
- 1990年(平成2年)**
 - ・アングラの演出家として流山児祥が入会。以後多くのアングラと呼ばれる演出家が入会。
- 1992年(平成4年)**
 - ・第1回「日韓演劇人会議」を開催。(東京芸術劇場「実行委員」ふじたあさや、貝山武久、流山児祥)
 - ・11月に北京の小劇場を訪問。国際シンポジウムに参加。
- 1993年(平成5年)**
 - 千田是也理事長、ふじたあさや副理事長、事務局長貝山武久体制となる。
 - ※事務局長・流山児祥、事務局長・坂手洋二。
 - ※会員数が300名となる。
- 1994年(平成6年)**
 - ・「94年春・演出家の集い」開催。(シアターX)
 - ・「演劇大学」再開される。(松本市民会館)
 - ・「日韓演劇人会議」開催。
 - 12月、千田是也の死去に伴い、任期終了まで阿部広次が理事長代行となる。
- 1995年(平成7年)**
 - ・1月「日中演劇フォーラム」開催。(テロップ座)
 - ※林兆華の演出「ハムレット」上演。
 - ・阪神大震災により被災した関西支部会員への義援金のカンパを募る。(会員99名より54万3千円が集まり関西支部へ送る)
 - ふじたあさやを第3代理事長に選出。
 - ※副理事長・石澤秀一、高瀬精一郎、流山児祥、事務局長・貝山武久、副事務局長・坂手洋二。
- 1996年(平成8年)**
 - ・「日韓演劇人会議」開催。(テロップ座)
- 1997年(平成9年)**
 - 第4代理事長に成井市郎選出。事務局長に和田喜夫が着任。
 - ・「日韓演劇人会議」開催。(ソウル)
 - ・ふじたあさや提案により「演劇大学in飯田」が始まる。5年間の企画。
 - ※これを契機に文化庁に助成申請し、2000年より毎年各地での開催を始める。
- 1998年(平成10年)**
 - ・「東南アジア演劇研究研修セミナー」開催。(世田谷パブリックシアター、群馬・川場村)
 - ※6か国招聘(インドネシア・フィリピン・タイ・シンガポール・マレーシア・台湾)
 - ・協会事務所を新宿御苑に移し独立。全ての作業を独自で開始する。
 - ・演劇大学in飯田 開催。
 - ・「日韓演劇人会議」開催。(テロップ座)
- 1999年(平成11年)**
 - ・「国際演劇交流セミナー」を開始する。第1回は5月のカナダ特集。11か国13回の開催。
 - ・「日韓演劇人会議」開催。(ソウル大学路花樹会館) 9月17・19日
 - ※この会議において日韓演劇交流を拡大するために両国の演劇関係団体の交流を提案。これにより「日韓演劇交流センター」が生まれ、2002年より韓国との戯曲翻訳などの活動が始まる。
 - ・8月に「演劇大学1999 in飯田」開催。
- 2000年(平成12年)**
 - ・「日韓演劇人会議2000」開催。(杉並会館)
 - ・5月に「演劇大学2000 in飯田」開催。
 - ・「国際演劇交流セミナー2000」9か国9回の開催。
- 2001年(平成13年)**
 - 第5代理事長に瓜生正美を選出。事務局長は和田喜夫が継続。
 - ・「若手演出家コンクール」を開始する。(北沢「劇小劇場」)
 - ・演劇大学2001 in飯田 名古屋で開催。
 - ・「国際演劇交流セミナー2001」6か国7回の開催。
- 2002年(平成14年)**
 - ・「日韓演劇人会議」開催。
 - ・「日韓演劇交流センター」と「日韓演劇交流協議会」の交流開始。(杉並会館)



2001 若手演出家コンクール第1回最終審査



1999 日韓演劇人会議 (ソウル)



1996 演出家の集い



1989 新年会 (千田是也氏を中心に)



日本演出者協会 歴代理事長



第七代目理事長
和田喜夫



第六代目理事長
福田善之



第五代目理事長
瓜生正美



第四代目理事長
戌井市郎



第三代目理事長
ふじたあさや



第二代目理事長
千田是也



初代理事長
村山知義

撮影：姫田蘭

写真所蔵：
早稲田大学演劇博物館

- ・演劇大学2002」を若手湯田福岡、飯田で開催
- ・国際演劇交流セミナー2002」16か国13回の開催
- ・若手演出家コンクール2002」を実施
- 2003年(平成15年)**
 - 第6代理事長に福田善之を選出。事務局長は和田喜夫が継続。
 - ・演劇大学2003」を札幌、盛岡で初開催。他に飯田でも開催。
 - ・国際演劇交流セミナー2003」12か国11回の開催
 - ・若手演出家コンクール2003」を実施
 - ・演出家の仕事60年代・アンブレラ・演劇革命」出版。
- 2004年(平成16年)**
 - ・演劇大学2004」を神戸、岡谷、札幌で開催。
 - ・国際演劇交流セミナー2004」7か国8回の開催
 - ・若手演出家コンクール2004」を実施
- 2005年(平成17年)**
 - ・優秀指導者特別指導事業を実施。(講師：ロジャー・リース)
 - ・協会事務所を芸能花伝舎に移す。
- 2006年(平成18年)**
 - ・優秀指導者特別指導事業を実施。(講師：セルゲイ・チエルカフスキー)
 - ・演劇大学2006」を札幌、米子で開催
 - ・国際演劇交流セミナー2006」7か国7回の開催
 - ・若手演出家コンクール2006」を実施
- 2007年(平成19年)**
 - 第7代理事長に和田喜夫を選出。事務局長に大西一郎が着任。
 - ・演劇大学2007」を横浜、熊本、札幌、鳥取で開催
 - ・国際演劇交流セミナー2007」9か国8回の開催
 - ・若手演出家コンクール2007」を実施
 - ・演出家の仕事戦新劇」出版。
 - ・海外戯曲アンソロジー」出版。
- 2008年(平成20年)**
 - ・演劇大学2008」を6都市で開催
 - ・国際演劇交流セミナー2008」8か国8回の開催
 - ・若手演出家コンクール2008」を実施
 - ・海外戯曲アンソロジーII」出版。
- ・協会誌「D」を創刊する。
- ・年鑑「国際演劇交流セミナー2007」発刊
- 2009年(平成21年)**
 - ・第1回「日韓演劇フェスティバル」開催。(会場：池袋あざさすぽっと)
 - ・演劇大学2009」を愛媛、中津川、札幌、愛知で開催
 - ・国際演劇交流セミナー2009」7か国7回の開催
 - ・若手演出家コンクール2009」を実施
 - ・アジア演劇祭in上海 参加。(関西プロダクション)
 - ・演出家の仕事八十年代・小劇場演劇の展開」出版。
 - ・海外戯曲アンソロジーIII」出版
 - ・年鑑「国際演劇交流セミナー2008」発刊
- 2010年(平成22年)**
 - ・日本の近代戯曲研修セミナー」を開始する。
 - ・演劇大学2010」を11都市で開催
 - ・国際演劇交流セミナー2010」6か国6回の開催
 - ・若手演出家コンクール2010」を実施
- 2011年(平成23年)**
 - ・東北震災の支援事業としてフェニックス・プロジェクトを開始。(6月25日)
 - ・フェニックス・プロジェクトを2011」を実施。(7月8日)
 - ・フェニックス・プロジェクトを2012」を実施。(8月18日)
 - ・演劇大学2011」を9都市で開催
 - ・国際演劇交流セミナー2011」7か国8回の開催
 - ・若手演出家コンクール2011」を実施
 - ・日本の近代戯曲研修セミナー2011」を名古屋、札幌、東京で開催
 - ・年鑑「国際演劇交流セミナー2010」発刊
- 2012年(平成24年)**
 - ・第2回「日韓演劇フェスティバル」を東京・大阪・福岡で開催。(1・2月)
 - ・ソウル演劇協会・韓国演出者協会・韓国小劇場協会と交流の覚書交換
 - ・フェニックス・プロジェクト2012」を実施する。(3月10・11日)
 - ・フェニックス・プロジェクト2013」(あさか開成高校、相馬高校、新宿高校を招き)公演シンポジウムを実施。(8月11日)
 - ・演劇大学2012」12都市で開催
 - ・国際演劇交流セミナー2012」4か国4回の開催
- ・若手演出家コンクール2012」を実施
- ・日本の近代戯曲研修セミナー2012」を3都市で開催
- ・年鑑「国際演劇交流セミナー2011」発刊
- 2013年(平成25年)**
 - 6月より一般社団法人となる。役員は継続
 - ・フェニックス・プロジェクト2013」を実施する。
 - ・演劇大学2013」を9都市で開催
 - ・国際演劇交流セミナー2013」5か国6回の開催
 - ・若手演出家コンクール2013」を実施
 - ・日本の近代戯曲研修セミナー2013」を3都市で開催
 - ・年鑑「国際演劇交流セミナー2012」発刊
- 2014年(平成26年)**
 - ・日韓演劇作品交流プロジェクト「演劇をつなごう」を開始する。(韓国・劇団可変カビヨン「無様なメディアの詩」、日本・劇団チヨコレイトケーキ「親愛なる我が総統」)
 - ・フェニックス・プロジェクト2014」を実施する。(6月23日)
 - ・演劇大学2014」を9都市で開催
 - ・国際演劇交流セミナー2014」4か国6回の開催
 - ・若手演出家コンクール2014」を実施
 - ・日本の近代戯曲研修セミナー2014」を3都市で開催
 - ・年鑑「国際演劇交流セミナー2013」発刊
- 2015年(平成27年)**
 - ・日韓演劇作品交流プロジェクト「演劇をつなごう」第2回実施。(韓国・劇団昌世「チャンセ」(ソレモ)、日本：CHAPLIN「FRIENDS」踊る戯曲1〜)
 - 事務局長を大西一郎、小林七緒の2人体制とする。副理事長：宮田龍平、流山兜平、常務理事：西沢栄治、日澤雄介、大西一郎、小林七緒
 - ・演劇大学2015」を7都市で開催
 - ・国際演劇交流セミナー2015」7か国7回の開催
 - ・若手演出家コンクール2015」を実施
 - ・日本の近代戯曲研修セミナー2015」を3都市で開催
- 2016年(平成28年)**
 - ・日韓演劇作品交流プロジェクト「演劇をつなごう」第3回実施。(韓国・劇団バサカス「煉獄」、日本：弦巻菜園「四月になれば彼女は彼は」)



2012
フェニックス・プロジェクト vol.5



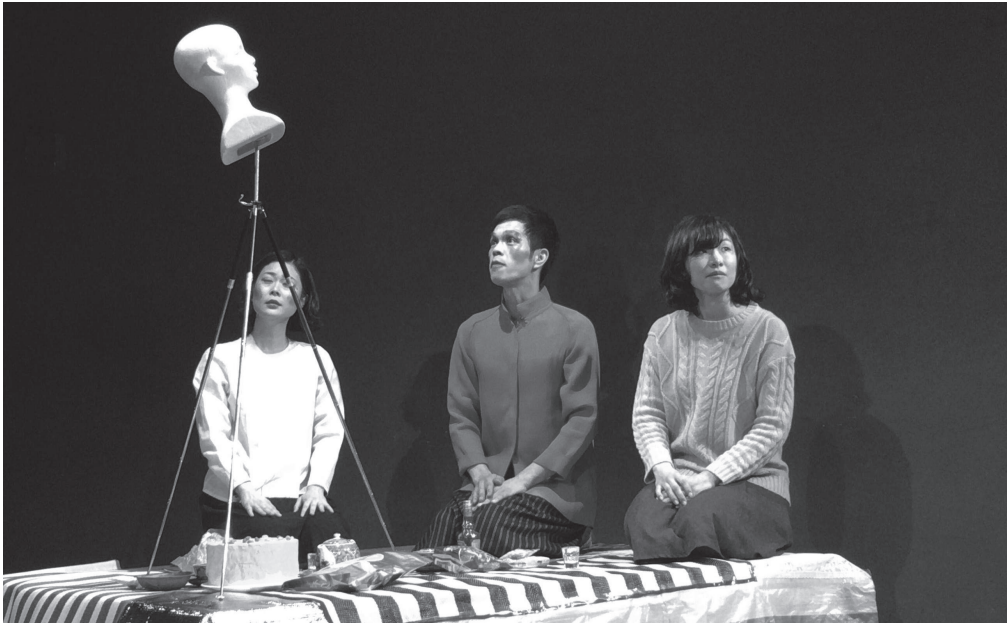
2009
第1回日韓演劇フェスティバル



2002
イラク攻撃と有事法制に反対する演劇人の会

若手演出家 コンクール 2015

最優秀賞 決定



演出家：西尾佳織（東京都／鳥公園）

『ペルソナ』（講談社文庫『犬婿入り』所収）

原作：多和田葉子

出演：武井翔子、清水穂奈美、山崎皓司

■最優秀賞受賞のお気持ちを聞かせてください。
いざ賞をいただいてから、ああこれは大変なことだと思いましたが。名前を戴くというのは、その重みを背負うことだと思うので、それに相応しいものに、むしろこれからなっていくかなくてはいけないのだと思います。と、思う一方で、そんな風に考える自分はまじめぶっていて暑苦しいという気もします。言葉では色んなことを言っていますが、口ばかりにならぬよう、作品で示していきたいです。

■応募の動機をお聞かせください。
普段とは違う、アウェイの場所に行ってみようという感じで応募しました。演劇をやっている、褒めて頂いた時も、けなされてもピンと来ない自分がいて、何なんだろうなって。やって来たことが順調かそうでないかと言えば、望む方向へ進んでいて、創作の場を頂く事はできているのだけれども、正直、何が出来ていて、何が出来ていないのかがよくわからなくなっている自分がいて、コンクールという場だったら、言葉でビシッとやっていただけるんじゃないかと思って来ました。

■劇作家と演出家についての見解をお聞かせください。
私は、自分が劇作家だと思っていないで、それは、戯曲を書けないんですよ。上演台本を人とか、場があつて作ることはできるけれども、書き下ろしは多分出来ない。戯曲と上演台本が違うということって重要で、そのことがもつと、作と演出をひとりの人が兼ねるケースでも自覚的に扱われるようになっていいと思います。演出家も言葉は書くけれど、劇作家と演出家の言葉の種類は違う。今回は演出のコンクールなので、自分で書かずに小説から上演台本をつくりました。



劇作家、演出家、鳥公園主宰。
1985年東京生まれ。幼少期をマレーシアで過ごす。2007年に鳥公園を結成以来、全作品の作・演出を担当。「正しさ」から外れながらも確かに存在するものたちに、少しボケた角度から、柔らかな光を当てようと試みている。2015-16年度（公財）セゾン文化財団ジュニア・フェロー、およびアトリエ劇研アソシエイトアーティスト。

■美術のイメージをお聞かせください。
ペルソナのイメージは洪水です。小説中にも、朝の繁華街がお酒の空き瓶や煙草の吸殻なんかで散らかされていて洪水の後のようだといっている所があつて、何か水際というか沼。綺麗と汚いとか、男と女とか、人種とか、色々な対立項の間の領域の話をしたいなと思いました。大きな食卓のような、浮浪者の仮住まいをイメージしてレジャーシートやブルーシートを接ぎ合わせたもので覆い、それが同時に日本のこたつみたいにも見えたらいいなと思いました。

■演出でこだわった所はどこですか？
ちゃんとペルソナをやるぞって思っていました。いつもは、どんどん脱線していつ、最終的に跡形も無くなっちゃうんですけど。でも、ちょっと前までは、エピソードを小説から抜き出しただけで…。やれてないなあって感じもありました。やっと自分達のペルソナになってきたかなあ。という感じです。

優秀賞 山口将太郎 (鹿児島 / Empty-Kubrick)

『「こある部屋」』 構成・演出・振付：山口将太郎 / 出演：歌川翔太、内田斗希央、香取依里、久保田舞、中村駿、山口将太郎



1991年、鹿児島県生まれ。ダンサー／振付家／演出家。ダンスカンパニー<Empty-Kubrick>主宰。アーティストのMV振付や上野隆博、香瑠鼓の振付テレビCMに出演。NEXTREAM21 in Rikkoukai 2014 最優秀賞。ダンスサミット in Japan 2014 グランプリ。2015年よりダンスカンパニー<Co. 山田うん>参加。

■応募のきっかけは？

スズキ拓朗さんが若手演出家コンクールで最優秀賞を取った作品を観て、自分もダンスと演劇で寄り添える作品を作りたいと思って応募しました。一次審査の作品は、台詞はあっても、話の筋はあるようないい作品だったので、二次審査でもっと演劇に寄り添った、1つのストーリーをダンスで追っていくような作品にしたいと、「こある部屋」を作りました。

■初日のアフタートークで「丸い」よりは「四角い」という感想が来ました。その辺りはかなりの意識されて作ったんですか。

元タストリートダンス出身で、ロボットダンスの角が硬い質感が好きで、振付にはよく取り入れています。あと、ゲームの「メタルギア」で主人公がタンボールの中に隠れるのが面白くて、いつかタンボールを使いたいと思っていました。実際に稽古場でタンボールを見たら、どんどんアッテアが浮かんできて、四角に拘ったというよりは、面白い動きを追求していったら四角だった、という感じです。本当は、この作品は「色」のイメージからスタートしたんです。色による心理の変化、出てくる人が赤、青、黄色、白、最後に黒が出て、タイルみたいになっていく。なので自分ではそこまで角を意識してはいなかったんですが、見た人がそう思ったならそれが正解なんです。自由に想像して楽しめるのがダンスのいいところなので。

■今後の抱負を教えてください。

■今後の抱負を教えてください。もうちょっと演劇に寄ったような作品も作ってみたい。今は色々なことに挑戦したいですね。



photo by bozzo

優秀賞 小佐部明広 (北海道 / 劇団アトリエ)

『「一番之居」』 演出・脚本：小佐部明広 / 出演：信山E絢希、伊達昌俊、有田哲



1990年生まれ。劇団アトリエ代表(2011年結成)。高校から演劇を始める。『もういちど』で札幌劇場祭TGR2011新人賞受賞。札幌発ショートドラマ『三人のクボタサユ』(NHK札幌・テレビドラマ)の第2話の脚本を担当した。

■応募動機をおしえてください。

とにかく演出のコンクールとか脚本のコンクールはなるべく出そう、と思っていて。落ちると「ああ、まだまだだったんだな」と思います。

■3人の俳優が対面しない3人で落語をしているような(スタイルの演出ですがこれはかなり珍しいんですか？)

■珍し目のスタイルです。

■じゃあ普段はお話にそった美術を組んでお話にそった衣装を着せてやっているという感じなんですか。

■そういう風にやることの方が多いです。

■「コサベ」という役が出て来ますがどのくらい本人に近いでしょうか。

■1を10にして書いているというか、ちょっと思っていることを過激に書いている感じですね。なので、ちょっとは近いと思っています。

■今後の展望は。

■今後の展望は。来年はどこか北海道以外の場所、東京とかでやってみたいです。



優秀賞・観客賞 村井雄 (東京都 / 開幕ベナントレース)

『「1969:A Space Odyssey? Oddity」』 脚本・演出：村井雄 / 出演：開幕ベナントレース



脚本家・演出家・俳優。鋭い戯曲解釈により大胆な作品構成、独自の世界観に基づく美しい空間構成に定評があり、2015年のフランス公演では「本物のアーティスト的な体験」(フランス/La Provence誌)と高い評価を受ける。2012年若手演出家コンクール優秀賞・観客賞、2013年利賀村演劇人コンクール奨励賞、2014年世田谷区芸術アワード「飛翔」を受賞。

■2011年に一度優秀賞に選ばれていますが、そこからずっと応募を？

■いえ。2回目ですね。制作もやっている高崎が応募しました。海外公演以外での上演の機会が欲しくて。

■たかさんの受賞歴をお持ちで若手というイメージじゃないような気がするんですが…

■そんなことはないです。28歳から演劇を始めたので全然若手ですよ。

■村井さんが舞台を見ているかたちで出演されていましたがあれはいつもなんですか？

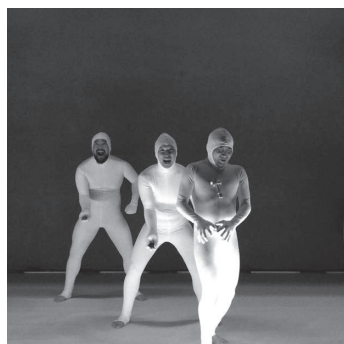
■いえ、いつもではないです。

■あのセリフの偽神父みたいな話し方もテーマに則っているんですか？

■そうですね。今回の作品では「すべてのコミュニケーションはカタコトである」ってメッセージもありますので。

■協会に対して何かありますか？

■協会の事業でやりたいことがたくさんあります。すごく面白そうなおことたくさんやっていると思うので。



若手演出家コンクール 2015 公開審査

審査上演は、2016年3月1日(火)〜3月6日(日)下北沢「劇」小劇場にて行われ、最終日6日17時より公開審査が行われました。審査員は各々2票の投票権を持ち、最優秀者を決定。審査員は、青井陽治・今村修・瓜生正美・加藤ちか(美術家)・鐘下辰男・佐野バビ市・篠崎光正・鈴木裕美・平塚直隆・松本修・流山児祥の11名(アイウエオ順)。

講評(主審査員の発言より抜粋)

小佐部明広

(北海道/劇団アトリエ)

青井▼古典芸能の手法を借用しながら、自分達の一番日常的な所を語っている。何も無い所を話芸だけで成り立たせようとすると戦略も、新鮮ではないにしてもきちっと練りこまれたものもあるし、そくそくと普遍的なものに吸い寄せられていった。

松本▼動きを封じて、喋ることだけに徹しようという事で、その潔さはいいなと思っただけだ、お話の中身や、語り口も普通だなどという感じで、何を表現

したかったのかなあ?という事が、僕にとってはちょっと不明瞭な舞台だった。

佐野▼前説的な入り方は、全然いいと思うんですが、いわゆるお客さんとの間にあるステージとの見えない壁に風穴を開けてくれるとか、お笑いの様な手法はいいが、その割には、それに対する心構えや、噛んだりするアクシデントに対応する覚悟が感じられなかった。

西尾佳織

(東京都/鳥公園)

今村▼ここに描かれている周囲の人々が、ドイツに暮らしながらも日本をひきずっていたり、その事に全く疑いを持っていないかったり、小説よりも、今の時代を取り巻く妙な気持ち悪さがストリートに結びついて、とてもよく描けていると感じました。

鈴木▼意図的なのかもしれないが、様々なアイデアが舞台上に投げ出されてしまっていると思います。非常に知的だけれども、演出家の興味が観客や伝えたい内容ではなく、ご自身に向いているというか。演出的アイデアが、舞台から観客に向かって笑いかけてくれない感じがしました。

村井雄

(東京都/開港ペンントレース)

鐘下▼よく身体と言われているんだけど、力技と言ったら怒られるかもしれないけれど、ある種、演劇的で強靱な身体が舞台上であって、空間を捻じ曲げていくっていうのは嫌いじゃないんだが、捻じ曲がり切っていないんじゃないかなと思った。

流山児▼自堕落な身体を引き受け、引用とパクリだらけの「テキスト」なんかメチャクチャに「解体する」演出家・村井雄の乾いた批評する「眼と精神」がみえたかった。自己撞着のスノッブだけにはなつてほしくない。身体を喪失したトーキョー演劇から遠く離れて愛すべき役者たちと、低い目線で《世界》を旅してください。素敵な「劇団員」たちと《世界》を旅する冒険家たれ。「観客」は、君たちについているんだから。

篠崎▼笑いが少ない部分は、空間の違いとか色んな事があって少しズレが出ているのかもしれないけれども、演出家としてはパッケージングしすぎた事に問題を感ずる。「瞬間」に極限の演技をするいつものやり方が良かったと感じました。

山口将太郎

(鹿児島/Empty Kubrick)

瓜生▼芝居は芝居。踊りだけで語る事は出来ると思うんだけど、語る気があんまり無かったっていうかな。芝居の中でのダンスが一つの役割で、ストーリーの中で描かれてるっていう風にはならなかった。

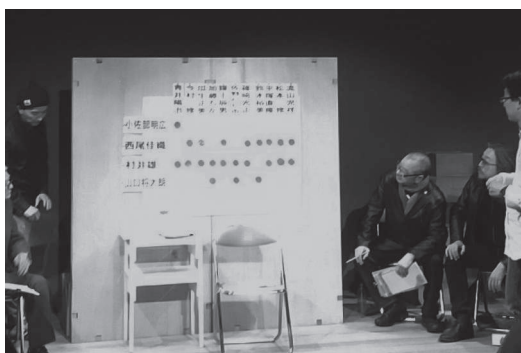
加藤▼演劇において見ている側は、作品の中の事件における行動で何かを発見し、感動したりしますが、この作品は、事件としては何も起こってはいなかったが(不可思議な事が起こる説得力に欠けた為)、自分が目にしている者の、肉体訓練されている面白さや、作品構築は秀逸だったと思います。

平塚▼すごいカッコいいし、1個1個がとても面白い。でも、1個1個って感じがしちゃうって、つなぎの時間が凄く落ちちゃうんですね。演出として、今ここで何が起ってるかをもっと考えなくちゃいけないし、その辺が曖昧な気がしました。

審査経過概要

101名から第一次で15名通過、第二次で、4名選出。公開審査第1回投票結果、小佐部1票、西尾8票、村井10票、山口3票となり、上位2名の最終投票へ。西尾7票、村井4票で西尾佳織氏が最優秀賞に決定。

4作品全作観劇した観客によって行われる観客賞は、36票中、小佐部8票、西尾2票、村井19票、山口7票で、村井雄氏に決定。



日韓演劇作品交流プロジェクト 「演劇でつながろう」

今年で3回目を迎えた日韓演劇作品交流プロジェクト「演劇でつながろう」が無事終了しました。ソウル演劇協会からは劇団ババサーカスの「煉獄」、日本演出者協会からは弦巻楽団の「四月になれば彼女は彼を」を交換上演しました。

今回の劇団ババサーカスの公演は、さらに多くの方に韓国の演劇に触れて欲しいと考え、若手演出家コンクール最終審査と併行しての開催としました。下北沢の二つの劇場で同時期に実施する初の試みでしたが、本多劇場グループの暖かいご協力があり充実した交流を実現できました。今年も演劇評論家の新野守宏さんが原稿を快諾して下さいました。来場して下さいた皆様を含め深く感謝申し上げます。

和田喜夫



劇団ババサーカス『煉獄』脚色・演出：イ・ウンジン
日程：2016年3月3日～6日 会場：小劇場B1（下北沢）



『メディア』を現在につなぐ試み — 劇団ババサーカス公演『煉獄』

新野守宏（演劇評論家）

三組の男女ペアが登場する。抒情的な言葉を語る彼ら／彼女らは、時に激しく体を動かしながら、男女の感情のもつれを観客に伝える。本来は一組の男女の物語である。かつてお互いを心から愛した男女がいた。異国の男と恋に落ちた王女は、愛する男と一緒にいるため、父を裏切り弟を殺して出奔した。しかし男の愛はいつまでも続かなかった。大きな代償を払って得た彼女の愛は、別の妻を迎えた男の冷たい心変わりや機嫌に憎悪に変わる。その果てに彼女は、新妻を焼き殺したばかりか、二人の息子を自ら自らの手で殺害してしまう。

これはギリシャ悲劇『メディア』（エウリピデス）で有名なメディアとイアソンの物語だが、ババサーカスの三組の男女が演じたのはその後日談であった。原作は、アリエル・ドーフマンが二〇〇六年に公刊した『煉獄』である。上演会場となった下北沢小劇場B1の舞

台には、格子と扉を模した簡単なセットがあり、愛と復讐の後遺症に悩まされている三組の男女が現れ、お互いを責め立てる。この閉ざされた空間は、天国と地獄の間にあるとされる「煉獄」そのものを表現していた。

ドーフマンの原作には男女は一組しか登場せず、その名前も言及されない。監視カメラ付きの部屋に閉じ込められた女を白衣を着た男が責めたかと思うと、女が白衣を着て男を責め、最後に再び男が白衣を着て女を責める。古代のメディアとイアソンの体験は素材として暗示されるにとどまり、むしろ現代社会の権力と差別構造が俳優の演劇的な遊戯を通して浮き彫りになる。発話したときの俳優の位相（どの体験をどの時点から語るのか）を多層的に仕組むことのできる魅力的な戯曲だろう。

ババサーカスの舞台は、原作の一組の男女を三組にして、視覚的にも複数化したところに特色があった。三組のペアが身体表現を重視して台詞を多声（ポリフォニー）的に響かせることもあれば、一人の男に三人の女がからんだり、ペアのパートナーが入れ替わったりすることもあった。場面に応じて六人の俳優を使い分ける自在さとスピード、そしてそれを表現する俳優たちの身体性が際立っていた。

ドーフマンの原作では、二人だけの対話劇が究極の権力関係の縮図として示される。ババサーカスは登場人物を三組に増やし、コレオグラフィーを重視して対話劇を躍動させ、ギリシャ悲劇の『メディア』の体験を現在につなぐようとした。

若手演出家コンクール2014

最優秀賞受賞記念公演

受賞者 弦巻啓太さん
インタビュー



■最優秀賞受賞の前と後で変化はありましたか？

演出家として認めてもらったというか、入り口に立たせられたという意識が凄くあって、色々自分の中で試した公演でしたが、こういう試みはもっと掘り進んでいいんだなという、一つ背中を押して頂いた気がしたので、それをこれからもやっていきたいと思えます。

■受賞公演の作品について

劇作家としては、若手演出家コン



▲ソウル公演の様子



▲日本公演の様子

「サウンド・オブ・サイレンス」
作・演出：弦巻啓太
会場：劇 小劇場（下北沢）

クールに出る前から、相当色々やってきたような気がしていて、ありがたい事に代表作と呼ばれるものもいくつかあったのですが、同じ事ばかりやっていてはダメだなと思ひ、自分は、同じことしかできない脚本家にもなりたくないと思って、今の自分にピッタリと感じられるテーマを必然ある形で描くことにトライして、こういう作品になりました。

■海外での上演について

岸田國士の作品であったりとか、その時代設定があるので、それを丁寧に伝えるというか、きっちりやりたい。作品の面白みが伝わるとかそういう次元じゃなくて、ちゃんと伝え方を整理するというか。やってみて伝わるか伝わらないかの摩擦を感じていきたい。その齟齬に興味があります。

演劇大学 in いがた

2015年5月2日・5日
会場：新潟大学（五十嵐キャンパス）／新潟古町えんとつシアター
講師：新潟大学、小林七緒、平塚直隆、鹿目由紀、西川信廣、土田英生、松本峻、坂手洋二、村井健
企画制作：一般社団法人日本演出者協会／企画運営：演劇大学 in いがた実行委員会（井上ほりりん、石附学、齋藤陽一、久保田慎、樋口伸介、廣瀬珠実、引場道太、島村哲平、市井優、逸見衣梨、駒澤勝子、樋口圭介、創るつながりプロジェクト、矢頭勲、大久保勝信）
主催：文化庁（一般社団法人日本演出者協会）後援：新潟大学、協力：国際映像メディア専門学校俳優タレント科
文化庁委託事業（平成27年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業）

対話、対話、対話。今回の演劇大学のみならず、この3年間の新潟での演劇大学を象徴するのは、この言葉だったと思われる。

新潟という土地柄、ロシア演劇をひとつのテーマとして、スタニスラフスキー・システムによるワークショップを3年間ずつと行ってきたのだが、その第一歩は、「むもめみ」。参加者は、この言葉にのせて、様々な感情を相手に届けることを目指した。3年間を通して参加した方も見られ、人気が高さがうかがえた。

今年の演劇大学の目玉は、演劇バトル。小林七緒、平塚直隆、鹿目由紀の3人の講師が担当したが、講師はあくまで演出を指導するのであって、役者を指導する訳ではない。演出家として応募していた3人が、あらかじめ渡されていたチェーホフの短編小説『芸術品』をどのように芝居にするのか事前に考えてくる。この課題に、講師陣は、若干の戸惑いを覚えたようだ。そこで、大交流会の場などでも紹介があったように、まずは、それぞれの担当の演出家に「何をやりたいの?」と聞くことから始まったようだ。それに対して演出家は何



をやりたいのか答える。それならこういう手があるよ、など今度は講師が答えて、対話を繰り返すことで、それぞれのチームの作品ができあがっていった。わずか4日間の作業であったが、前年にできた古町えんとつシアターで行われた3作品の発表会では、それぞれ個性豊かな作品に仕上がっており、観客を楽しませた。なお、優勝したチームには、えんとつシアターで後日公演する権利が与えられた。

講師陣が全員参加してのシンポジウムも開かれ、現在、新潟の演劇がどのような状況にあり、それを発展させていくには何をすればよいのか? 活発な議論が行われた。ここにもまた、新潟で活動を続ける演劇人と、講師陣や別の地域からの参加者との間での「対話」があっただろう。最後に、今年だけでなく、3年間の活動をまとめる意味でも「大交流会」が開かれた。勿論、すぐにまた演劇大学を開ける訳ではないが、この3年間で培ったものを糧に活動を続けていくことと再会を約束して、散会したのだった。

演劇大学 in Ishikawa

2015年8月27日・30日
会場：松任学習センター／市民工房うるわし／白山市労働会館／千代女の里 俳句館
講師：坂手洋二、流山児祥、西垣耕造、清水きよし、松田若子、荒川ヒロキ
制作：一般社団法人日本演出者協会
運営：演劇大学 in いがた実行委員会（岡井直道、黒田百合、本庄亮、吉田昭男、本田精志、所村佳子、林美智江、前佳澄、北山久美子、新藤未紗、辻弥里）
主催：文化庁（一般社団法人日本演出者協会）後援：白山市、文化庁委託事業（平成27年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業）

2015年の演劇大学 in Ishikawaは、白山市を中心に開催いたしました。

まず坂手洋二講座は、2作品を戯曲から作品にするまで、丁寧に本読み、ディスカッションを交え、戯曲の方向性について話し合い、作家が書き直しながら行いました。坂手さんが手を入れることで、矛盾

が手を入れることで、矛盾が生じていたことに意味が生まれ、よりリアルな世界が生まれていきます。演出家として決断することなど、この細かく指導いただいた2人の作品は、最初の戯曲から大幅に進歩していました。集大成にふさわしい講座になったと思います。



また流山児祥講座は、初日から寺山修司『狂人教育』をテキストに、アップテンポが進みましたが、参加者は全力で吸収し、その世界観に身を置きながら、それぞれの課題に挑んでいきました。終わった後はすべてを出し切った満足感でいっぱいになったようです。

子どものためのワークショップ、シアターレッスンを、前回同様、西垣耕造さんに担当頂きましたが、理論に基づいた西垣さんの視点や声掛けなどに、あらためて学ぶ点が多く、みんな納得するとともに、それぞれが自分の場所へ持ち帰る材料を頂きました。清水きよしさんには今回、長時間のワークショップをお引き受け頂きました。より多くを学びたいと言う参加者の声がありそれが実現したわけですが、お腹いっぱい満足したという声が多々ありました。はじめてのお能は、宝生流能楽師の松田若子さんに担当頂きました。今までも能には無縁だった参加者もお能の楽しさに驚き、親しみを覚えたようです。映像ワークショップは、石川県出身の荒川ヒロキさんにお話ししましたが、映像と演劇が繋がるとどうなるか? その可能性を参加者は知り、その融合性を考える機会を頂きました。

こうして最後の演劇大学 in Ishikawaが終了しましたが、この3年間で様々な人が繋がりが、多様な関係が生まれました。これから自分の場所で、いい作品を創ることで恩返ししたいです。ご尽力いただきました皆さま、本当に有難うございました。

演劇大学 in 内子

2015年8月28日〜30日 / 9月5日〜6日

会場：内子座、内子自治センター
講師：小林七緒、西沢栄治、徳永高志、大沢佐智子、西川成美、宇高通成、西垣耕造、和田喜夫
制作：一般社団法人日本演出者協会、運営：演劇大学 in 内子実行委員会
主催：文化庁 / 一般社団法人日本演出者協会、共催：内子町、内子町教育委員会
文化庁委託事業「平成27年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」



演出家・俳優養成セミナー 2015
報告 II 林慎一郎

昨年で2年目を迎えた「演劇大学 in 内子 2015」は、平成27年8月28日〜30日、9月5日〜6日の5日間の日程で内子座を中心に開催されました。

実技講座は、「舞台上立つてみよう！Ⅰ・Ⅱ」と「舞台を創ってみよう！」の講座が同時進行していくような形で、今までと違った形を取り組んでみました。

「舞台上立つてみよう！Ⅰ」は、小林七緒先生が担当され、「夢十夜」を題材に、そして「舞台上立つてみよう！Ⅱ」は、西沢栄治先生が担当され、『ロミオとジュリエット』を題材に作品づくりをいたしました。演出面

でも内子座の特性が十分に活かされており、参加者もまた観客側も楽しめたと思います。

大沢佐智子先生、西川成美先生による「舞台を創ってみよう！」も演劇実技コースの舞台創りに関わるといふことでより実践的に学ぶことができ、また双方に関わる者が意見を出し合い、よりよいものができたと思います。「こども演劇クラブ」は、西垣耕造先生に担当していただき、子ども達も楽しみながら、また見せるということを意識しながら演劇を学ぶことができました。

「能舞台を体験してみよう！」の講座は、金剛流能楽師の宇高通成先生を講師にお迎えし、能のワークシヨップを分かり易くご指導いただきました。

「朗読講座」は、和田喜夫先生を講師にオーディオリア・アポリジニ二名作戯曲をパフォーマンスの要素を取り入れ、普段とは違った朗読を体験していただきました。

「内子座の歴史」「日本演劇の未来」の座学については、徳永高志先生に分かり易くお話しいただきました。

次回はい3年目の集大成を迎えますので、より充実したものになりたいと思っております。

演劇大学 in さかいで

2015年9月19日〜21日

会場：勤労福祉センター / 香風園 / 市民ふれあい会館
講師：土田英生、和田喜夫、田畑真希、清水よし、明野由佳、平塚直隆、三ツ本雄二、大方紗子
企画制作：一般社団法人日本演出者協会、企画運営：演劇大学 in さかいで実行委員会、主催：文化庁 / 一般社団法人日本演出者協会、共催：坂出市 / 坂出市教育委員会、後援：香川県教育委員会、朝日新聞高松総局、読売新聞高松支局、四国新聞、毎日新聞高松支局、産経新聞高松支局、山陽新聞社、NHK山陽放送、NHK西日本放送 / NHK瀬戸内海放送 / NHK岡山放送 / 香川テレビ放送網株式会社 / FBCテレビせとうち、NHK香川 / エフエム・サン株式会社
文化庁委託事業「平成27年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

香川県初開催となった演劇大学 in さかいで。開催地である坂出市は本州から瀬戸大橋を渡って直ぐに位置する人口約5万6千人の市で、沿岸部に造成された工業地帯が広がっています。

今回の演劇大学 in さかいででは、「演劇はおもしろい」をテーマに、3日間で8名の講師をお招きして、9つの講座と発表会、シンポジウムを行いました。3日間で延べ約500名の方にご参加いただき、香川県内だけではなく、県外からも多くの方に

ご参加いただきました。近年、四国の劇団間の交流が活発化している事が、県外からの参加の誘致に繋がったと思います。今後こういった動きは活発化していく、四国の劇団の県外公演等も増えていくように思います。



さて、講座の内容に関してですが、こどもの演劇体験では、なかなか演劇について学ぶ機会がないので定期的に行ってほしいとの意見も多くありました。声優アフレコ体験講座に関しては、募集後すぐに定員を超過締め切りでしたが、先着ではなく選考するべきだった

演出家・俳優養成セミナー 2015
報告 II 岡田敬弘

事が反省点です。戯曲と朗読の講座に関しては、市指定文化財記念物でもある香風園で開催され、趣のある茶室として使用されている家屋が非日常空間での文豪気分を演出しました。俳優向けのワークシヨップ、発表会・シンポジウムは、古い小学校の体育館のような場所で懐かしいような雰囲気の中開催されました。

これらの講座を通じて、演劇大学は今後坂出市における演劇の企画を幅広く誘致していくための、大きな足がかりとなりました。この経験を踏まえて、2016年の4月には演劇プチ大学 in さかいでと称して、演劇大学 in さかいで実行委員会主催で、こども向け・中高生向けのワークシヨップの開催と、演劇大学 in さかいでの戯曲講座で書きあがった作品を実際に演劇作品として3作品を発表しました。

今後、坂出市で多くの演劇企画が実施されるよう尽力していきます。

演劇大学 in 福岡

2015年10月7日、12日
会場：クローバープラザ/ゆめアルビル大橋
講師：石田聖也、山田恵理香、竹内元一、和田喜夫、山下島、外波山文明、清水きよし、桂勘、福田善之
シンポジウム：ゲスト・坂東三郎(サン・ニッケイ)、譚智泉(ジョニー・タム)
制作：一般社団法人日本演出者協会・企画運営：一般社団法人日本演出者協会福岡ブロック 主催：文化庁「一般社団法人日本演出者協会」
共催：公財団法人福岡市文化芸術振興財団/福岡市 協力：アットマネ・インターネットセンター福岡/九州大学大学院芸術工学研究院/シーシャルアトラボ
文化庁委託事業「平成27年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

「語り出す沈黙」をテーマに、外国人の目を通して日本をみてみるという観点から「小泉八雲」を題材に行われた最終年度。

初日は恒例となった瓜生正美校長による開校宣言からはじまり、「からだ・ことば・そうさく」と3つの切り口の座学を実施。からだ編は、桂勘講師の活動を通して舞踏全体の歴史について学びました。福岡市を拠点に活動をする3名の劇作家が自身の戯曲を題材に創作方法をシェアしたことは編。そうさく編は「街頭演劇」について合宿コースの講師陣が語りました。特に外波山文明講師の「野外演劇・軒先演劇・波打ち際演劇」の違いについての説明が好評でした。座学は聴講者からの質問も多くあり活発な場となりました。



2日目は中国・マカオから来た講師による体験講座とアジアでの演劇交流についての会議を実施。全講師や参加者も交えての自由な意見交換の場をもてました。仮面劇の講座は、仮面作りから始まりました。同じ作り方をしてもしンプルな仮面は作者に似てくる様子が印象に残りました。街頭発表会場の「冷

泉公園」は「博多祇園山笠」で山が集結する場所として親しまれています。最初の作品は冬枯れはじめた桜の木に花を咲かせたいと、外周の桜並木を眺めながら歩いての観劇。花壇の中で交差点を行き交う人々を背景に行われる、無言の仮面劇の世界。トランクを手に移動しながら倒れる演技を子供達が真似て大人気の作品。小雨に濡れながら舞踏の発表を見終わると、雨あがり青空の下で怪談芝居を大笑いしながら観るといふ天候の演出にも恵まれました。2時間かけて行われる振り返りでは福田善之講師の戯曲講座の様子も報告されました。

合宿中の朝講座には講師陣も参加するなどの縦横無尽な交流を大切に運営し続けたことで「福岡をアジアの舞台芸術交流拠点地に！」という当初からの目標につながる集大成となりました。会期終了後、仮面劇で作成した仮面を利用して自主公演を行う演出者もあり、演劇大学で学んだことが生かされ、広がっているのを感じています。

演劇大学 in くだまつ

2015年12月25日、27日
会場：スタービークレタまつ/宇松市文化会館
講師：松本祐子、大杉良、スズキ拓朗、桂歌奇、岩崎正裕、横山拓也、和田喜夫、企画制作：一般社団法人日本演出者協会
運営：演劇大学 in くだまつ実行委員会、パネリスト：園山土筆、高橋聖也、和田善夫、コーディネーター：堀永州平
主催：文化庁「一般社団法人日本演出者協会」共催：公財団法人下松市文化振興財団 後援：山口県教育委員会/下松市教育委員会/光市教育委員会 徳山大学、山口県高等学校文化連盟、山口県高等学校演劇協議会、Kビジョン株式会社/株式会社新周新聞社
文化庁委託事業「平成27年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

二回目のくだまつは、第一回を上回る、のべ300人余りの方にご参加いただいた濃い3日間でした。

松本祐子先生の演技・演出講座は、2チームに分かれて互いの演出・演技を観察し、感情のやりとりを視覚化する過程を学べました。演技はどんどん上達しましたが、さらに高みを目指される松本先生の熱さに刺激を受けました。
スズキ拓朗先生の身体表現講座は「注文の多い料理店」の世界を身振りやダンスで描きました。10歳から50歳までの誰もが、距離感やタイミング、何を描くかを大切にしつつも自由に楽しそうに演じているのが魅力的でした。



大杉良先生の講座は昨年度に引き続き大人気でした。各々の抱える問題をご指摘いただくたびに発声が変わるの魔法のようでした。発表された「葉桜」は、映像が浮かぶ、心を震わすものでした。

岩崎正裕先生のコミュニケーション力アップ講座は、すぐに使える演劇の基礎練習や関係作り活動の玉手箱でした。子ども向けの講座もやって欲しいと要望が出ました。
横山拓也先生の劇作講座は、みんなでひとつの簡単な劇作に挑戦し柱の大切さを実感した後、各々の書きたいテーマについて討論した上で劇作に挑みました。横山先生の指導を受けながら創った超短編は完成度の高い作品になりました。
和田喜夫先生の講義は、世界的視野を持つ先生ならではの講義でしたし、桂歌奇先生の落語講座はびりりと薬味の利いた笑い溢れる講座でした。
「演劇文化を根付かせるために」をテーマにしたシンポジウムは、しいの実シニアターの園山土筆さんや地元の高橋聖子さんや柳沢悟さんのご経験をお話いただき、続けることの難しさを感じつつも、得られた成果や演劇の持つ力に勇気づけられました。
永遠に続いて欲しいと思うほど、実り多い演劇漬けの3日間でした。
今回のくだまつは、2017年1月7日〜9日の連休です。最終年度として、さらに充実した3日間を目指して現在準備中です。みなさま、是非お越しくださいませ。

演劇大学 in きたかみ

2015年12月4日・6日
 会場：北上市文化交流センターさくらホール
 講師：佐野ハジメ、鹿目由紀、内山勉、スズキ拓朗、西山水木、和田喜夫、宮田慶子、吉村ゆう
 企画制作：一般社団法人日本演出者協会／演劇大学 in きたかみ実行委員会（新田満、菅原正志）
 主催：一般社団法人北上市文化創造／演劇大学 in きたかみ実行委員会（新田満、菅原正志）
 共催：一般社団法人北上市文化創造、後援：北上市劇場を盛り上げる会やっし、文化庁／一般社団法人日本演出者協会
 文化庁委託事業「平成27年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

2014年に引き続き2回目の開催。前回

の参加者は58名と少なく期待を裏切ったが今回は倍増の107名が参加し大変盛り上がった。アンケートの回収率は46.2%。この報告書では講座ごとに参加者の声を抽出して報告にします。

◇A 『3日間で芝居を創ろう』講師：佐野ハジメ
 「学校でやっている役に行き詰まっていたが、台本が無くて演じることができた。今回の経験を生活に活かしたい」

◇B 『短編戯曲を書こう』講師：鹿目由紀
 「時間が足りなかったが、すごく楽しかった」

◇C 『舞台装置の模型を創ろう』講師：内山勉
 「頭の固い自分にとって、のびのびとした発想、実施で、良い刺激を受けた講座でした」

◇D 『ダンスを踊ろう』講師：スズキ拓朗
 添付写真をご覧ください。表現できる楽しさが伝わってきます。

◇E 『表情豊かな声と言葉を』講師：西山水木
 「高校で国語の教師をしているが、授業に取り入れて表現する楽しさを教えたい」

◇F 『演劇大学バックステージツアー』講師：和田喜夫
 演劇初体験者を対象にした講座。各講座の様子を案内した後、演劇の楽しみ方を講義。

◇G 『楽しく字が1日体験』講師：宮田慶子
 「与えられた1枚のテキストからいろいろなることを想像し、作っていくことは無限大でし

た」

◇H 『声優に挑戦しよう』講師：吉村ゆう
 「演劇（舞台・芝居）となるとまだためらいがあるが、次回も挑戦してみたい。声優さんのスゴさを実感できた」

今回の特徴は①講座数が多い②市外からの参加者が多いことだ。初心者大歓迎をチラシにうたったキャッチコピーの効果もあったと思うが事務局のさくらホール担当者及び各実行委員が参加を広く呼びかけたことが参加者増に結びついた。演劇文化を市民に定着させるためには、努力を積み重ね、コツコツと実践を続けていくしかない。



演劇大学 in はちのへ

2016年1月22日・24日
 会場：八戸市公民館
 講師：小林七緒、中屋敷正樹、岩崎正樹、西垣耕造、田畑真奈、榎谷伸夫、清水きよし、坂口阿紀
 企画制作：一般社団法人日本演出者協会、企画運営：演劇大学 in はちのへ実行委員会
 主催：文化庁／一般社団法人日本演出者協会、共催：八戸市公民館（指定管理者 榎谷伸夫）
 後援：青森県教育委員会／八戸市八戸市教育委員会、東奥日報社／テリリー東北新聞社／八戸ミニメディア・ラジオ局 BFM
 文化庁委託事業「平成27年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

「榎谷さん、八戸で演劇大学やりませんか？」

僕の一人芝居『海村』を観に来ていた、和田喜夫理事長から声をかけられた。毎年全国各地で行われている演劇大学の案内を見ていて、「第一線で活躍する魅力的な講師がいっぱいだ。八戸でもできたらなあ」と思っていた僕は、ふたつ返事で引き受けた。

1月後半の金土日の3日間、八戸市公民館を会場に10講座が開催された。3日間、2日間、2時間半の1コマ等々、様々だ。僕は2日間の朗読講座を担当したため、それぞれの講座を詳しくは見学できなかったが、どの講座も講師と共に参加者が熱く挑戦していた。

「はじめての演劇体験」。

外国の演劇事情に詳しい和田講師が、僕たちの先入観を覆すようなブルガリアやアポロジの舞台映像を紹介してくれた。「3日間で劇を創る」では、小林組・中屋敷組共に、講師の個性溢れる指導のもと、3日間、老若男女汗まみれになって挑戦していた。参加できない僕は羨ましかった。清水講師の「パン

トマイム」の導入は身体のほぐし方。ちょっとだけ参加させて貰ったが、不思議なこと

に「3日間で短編戯曲を書こう」では、ユニークな岩崎講師の指導の下、面白い戯曲がたくさん誕生した。後日、参加者の声をまとめると、まさに『岩崎組』の

ような雰囲気だった。サウンド・オブ・ミュージックに取り組んだ「ミュージカル講座」、身体表現の妙を体験した「コンテンポラリーダンス」、たくさん子どもたちがワクワクドキドキの体験を全体で楽しんだ「子ども演劇体験」等々、参加者は生き生きとした表情で参加していた。

最終日の居酒屋での交流会には、3日間の熱き充実ぶりを反映してか、予想を大幅に上回る参加申し込みで大慌て。皆さん、大満足顔であった。

終了後、実行委員を務めた若手の演劇人から、「榎谷さん、またやりましょっつ!! 面白いっす!! 楽しっす!!」の声があがった。ぼくもそう思った。



演出家・俳優養成セミナー2015

報告 II 新田満

演出家・俳優養成セミナー2015

報告 II 榎谷伸夫

ジャパニーズ・コメディを読む！ 曾我廼家五郎&益田太郎冠者

2015年9月15日〜16日 会場：芸術花伝舎
企画制作：一般社団法人日本演出者協会 主催：文化庁／一般社団法人日本演出者協会 文化庁委託事業 平成27年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業

曾我廼家五郎作『十六形』『面師の妻』 演出：佐々木治己

益田太郎冠者作『高速度喜劇』『出来ぬ相談』 演出：黒川逸朗

シンボジウム「益田太郎冠者とジャパニーズ・コメディ」 パネラー：星野高
シンボジウム「曾我廼家五郎とジャパニーズ・コメディ」 パネラー：日比野啓

日本における喜劇論の古典は何だろうか。グ作品は、代表作である『高速度喜劇』（ハイ海外で言えば、ベルグソン『笑い』やウィルスピードコメディ）と女優劇である『出来ぬ相談』。一方、曾我廼家五郎は松竹新喜劇の源流となった人物である。曾我廼家の作品は千作近くであると言われており、現在でも二つの全集で読むことができる。まさにネタの宝庫といつてよい。『十六形』は日雇い人夫の給料未払いをめぐる労働劇であり、それを見た平沢計七に影響を与えた。『面師の妻』は謡曲『鉄輪』に発想を得た、あるいはパロディ作品と言えるもので、古典芸能への深い造詣と読み直しが見える。益田太郎冠者の演出担当は黒川逸朗氏、曾我廼家五郎の演出担当は佐々木治己氏。シンボジウムゲストには早稲田演劇博物館の益田太郎冠者展覧会を担当した星野高氏、アメリカのミュージカルを専門としながら、曾我廼家五郎を研究している日比野啓氏をお呼びした。滅多に話題にあがることのないこういった作品や作家たちを取り上げることが、日本の近代戯曲研修セミナーの意義であろう。



曾我廼家五郎



益田太郎冠者

一九一一年に開場した帝国劇場の役員でありながら、座付き作家として様々なコメディを書いた益田太郎冠者。帝国劇場の女優劇を率いた作家でもある。当時の風俗、文学やさらには演劇状況をもネタとして取り込んだ軽快なコメディを描いた通人である。リーダー

三好十郎と菊池寛の描いた世界と現代社会のつながりを探る！

2015年9月6日 会場：シアターZOO
制作：一般社団法人日本演出者協会 企画制作：日本の近代戯曲研修セミナー in 北海道 実行委員会 主催：文化庁／一般社団法人日本演出者協会 文化庁委託事業 平成27年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業

菊池寛作『入れ札』 演出：石川哲也

三好十郎作『その人を知らず』 演出：前田透

シンボジウム「今、日本の近代戯曲を演出するということ」

ゲストパネラー：青井陽治 パネラー：石川哲也、前田透、清水友陽

活動は、基本的に菊池寛担当チームと三好十郎担当チームの2チームに分かれて行われた。9月6日のリーディング公演に先立ち、8月上旬からおよそ週1回のペース。作品を読みながら気になったことを調べたり、議論を重ねたり。

初期は、2チームが同じ場所に集まり、場所を分け合つて活動。毎回、最後にチームごとに発表を行い、その後討論を行った。お互いの進行状況を共有するとともに、相手チームの作品についての議論にも参加する。これは、作品や作家について考察するうえで非常に有効だった。



8月中旬には東京より青井陽治氏を招いての講演会も開催した。調べても出てこないような知識をたくさん得ることができ、参加者はさらに知りたい欲求を掻き立てられた。

9月6日の発表に際しては、開演前に、そこに至るまでの活動の様子を、各チームの担当演出が記録からまとめたりポートを配布した。A4で16ページに及ぶ活動記録だ。「公演」ではなく「研究発表」の場として、研究の過程を当日の観客に知ってもらおうこと

はとても有意義だったし、自分たちが活動を振り返るとい意味でも、有効なことだった。実際のリーディング発表も、各チームの研究過程が凝縮された、非常に個人的な発表となった。発表後のシンボジウムでは、客席も巻き込んだ活発な議論が行われた。

今回の研究を入り口として、今後も札幌の中で研究の幅を広げていきたい。

チームごとに、同時期の作家について調べていたため、時代背景は重要な部分も多く、相手チームの作家について理解を深めると、自チームの作家を相対的にとらえることに繋がり、より多角的に担当作家について考えることができた。

何よりも良かったのは、参加者が「知りたい欲求」を抱き続け、「知る喜び」を感じ続けることができたことだ。話題は、一つの話題からさらに大きな話題へと、どんどん広

「家族」

2016年2月18日、20日 会場：名古屋市北文化小劇場
 制作：一般社団法人日本演出者協会 / 日本の近代戯曲研修セミナー in 東海2015 実行委員会 主催・文化庁 / 一般社団法人日本演出者協会
 共催：公財団法人名古屋文化振興事業団（北文化小劇場 協力）一般社団法人日本劇作家協会東海支部 / バイエンス / 名古屋市図書館
 文化庁委託事業「平成27年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

三島由紀夫作『火宅』 演出：森秋音
 岸田國士作『女人渴仰』 演出：齋藤敏明
 太宰治作『冬の花火』 演出：かしましげみつ
 特別企画「小説家が書く戯曲を読む」パネラー：諏訪哲史、天野鎮雄 司会：はせひろいち

今年の近代戯曲研修セミナーは「家族」をテーマに一般観客により親しみある作家の作品を選びリーディング公演を行った。上演作品は、森秋音演出、三島由紀夫『火宅』、齋藤敏明演出、岸田國士『女人渴仰』、かしましげみつ演出、太宰治『冬の花火』の3作品で、激動の時代を映した家族像を通して、現代の家族のあり方を照らし出そうとした。



「『火宅』は、「停滞したつまらない毎日を送る家族の崩壊や冷め切った夫婦を描いている、家族間のギャップは今にも通じるものがあり、自分の家族にもそういう部分があるのではないかと感じてもらいたい」という狙いの元、若手らしからぬ緻密な演出で上演した。

『女人渴仰』は、「女性への満たされぬ思いを抱く孤独で寂しい老人が、ある晩、街で春をひさぐ少女と出会い、誘われてホテルに入るも、少女には触れようとせず、自分のこれまでの人生を、今は亡き母親や妻、現在一緒に暮らす娘への充たされぬ思いを静かに語

日本の近代戯曲研修セミナー in 東海

報告 II 齋藤敏明

キッシュな太宰の、武骨な手触り感を出したい」という意図で演出。出演者が、朗読台本を映し出すスマートフォン画面を見ながらリーディングを行うという若手ならではの演出を試みた。

特別企画では、「小説家が書く戯曲を読む」と題して、芥川賞作家の諏訪哲史氏、地元のパテラン俳優の天野鎮雄氏をゲストに招き、はせひろいちの司会のもと、トークを行った。天野氏が松本清張の『いびき』（戯曲版、小説版）の一節を朗読したり、諏訪氏が戯曲への思いを語るなど、充実した企画となった。

〈大正期の戯曲〉日本の近代戯曲を読む！

2016年2月6日、7日 会場：劇団未来ワークスタジオ
 企画制作：一般社団法人日本演出者協会関西ブロック 主催：文化庁 / 一般社団法人日本演出者協会
 文化庁委託事業「平成27年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

横光利一作『恐ろしき花』 演出：坂本隆太郎
 岸田國士作『古い玩具』 演出：中嶋悠紀子
 シンボジウム 講師：正木嘉勝、湯浅雅子 パネラー：鈴木曉世、井上理恵 司会：菊川徳之助、森本景文

一日目の『恐ろしき花』。言葉はテンプル上に並んだMACの中に、大音響が延々と続く中、演者は音に合わせて、身体でリズムを刻み、セリフはマイクを通し早口で、その背景にはメディアプレイヤーの待ち受けのような画像がぐるぐる回ると回る。リーディングというよりライブ。



「一目目の『恐ろしき花』。言葉はテンプル上に並んだMACの中に、大音響が延々と続く中、演者は音に合わせて、身体でリズムを刻み、セリフはマイクを通し早口で、その背景にはメディアプレイヤーの待ち受けのような画像がぐるぐる回ると回る。リーディングというよりライブ。」と答え、舞台ではそれらを示す言葉を明示した。シンボジウムでは、さらにリーディングの意義についての意見交換も行われた。

シンボジウムでは、横光利一が〈新感覚派〉として感覚の触発や精神の爆発を論じ、時代の先鋭的な作家であることが紹介された。「舞台は面白く感じた。何か感覚を埋めて爆発するというものが現われていたのではないか。」とパネラーの鈴木氏は感想を述べていた。

やがて訪れた音もセリフもない静かな時間、映し出された雨の映像とト書き。演出の坂本氏も「シビれるなと思ったところはト書きだった。渋いなと思った。」と語っていたように、俳人でもある横光の言葉は、美しく染み入った。

2日目の『古い玩具』は、岸田國士の最初の戯曲である。フランス留学中に書かれたも

ことになっていった印象がある。しかしながら、取り組んだ若手たち（役者も含め）は、稽古場で研究者による事前研修を受け、いつもとは違う緊張感を持ち、パテランの演出家や大学教授らと交流することで、作品に対して客観性が持てたと聞く。成果は若手の中に確かにあり、次の作品につながっていくことと思う。

日本の近代戯曲研修セミナー in 大阪

報告 II 山本つづみ

坪内逍遙&小山内薫を読む！

2016年3月20日〜21日 会場：Chiba
制作：一般社団法人日本演劇者協会 主催：文化庁／一般社団法人日本演出者協会 文化庁委託事業 平成27年度次代の文化を創造する新進芸術教育成果事業

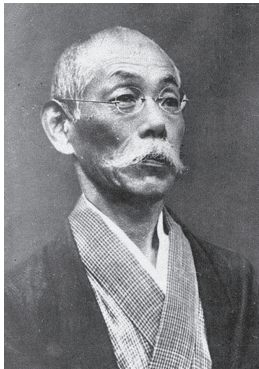
坪内逍遙作『役の行者』 演出：丸尾聡
小山内薫作『第一の世界』 演出：黒澤世莉
シンポジウム「作家・小山内薫について」 ゲストパネラー：熊谷知子
シンポジウム「坪内逍遙と日本近代演劇」 ゲストパネラー：日置重之

東京では、数年前より「大正シリーズ」と題して、文壇のボスの存在であった菊池寛、白樺派の武者小路実篤、那虎彦、大正喜劇の曾我廼家五郎、益田太郎冠者といった面々を取り上げてきた。今回は坪内逍遙と小山内薫という演劇史上に燦然と輝く2人を題材とした。

1926年（大正15年）に築地小劇場が初めて日本人劇作家の戯曲を上演したのが『役の行者』だが、演出は小山内薫であった。初めて発表された1916年（大正5年）に、坪内が率いる



小山内薫



坪内逍遙

文芸協会の島村抱月と松井須磨子の間に起きていた不倫騒動との類似性が指摘され、それを理由に上演が不可能であったと言われているが、私はむしろ、『役の行者』の中にある次のような台詞に興味を持った。「其方年来邪法を修し、愚民を惑はし、剩へ恐れ多くも天朝に対し奉つて、大逆を企つるの由訴人あつて明白なれば、朝命を承り、召捕りの為に相向うた」役の行者を捕まえに来た武官のセリフである。1912年に文芸協会にて上演されたズーダーマン作『故郷』は、イブセンの「人

形の家」と並ぶ、女性の自立の話だが、島村抱月演出ではラストに改変が行われた。内務省から教育勅語に抵触しているとのことで上演禁止が通告され、ラストで娘が後悔して懺悔すると言ふ脚本に変更。おそらく文芸協会でのこのような事態が起きているということを知りつつ、大逆事件以後の言論統制とその国家政策について思いをはせていたのではないか。これは妄想してみた想像だが、もう少し続けければ、小山内薫が『森有礼』という芝居を1926年（大正15年）、『役の行者』と同じ年に発表していることも興味深い。この戯曲は史実に基づき創作された、ラストは憲法発布と時を同じくして、暗殺される森有礼を描く。森が伊勢神宮で不敬な態度をとったことに憤った男が暗殺するのである。明治の終わりに起きた大逆事件、そして大正の終わりに上演あるいは執筆されたこれらの作品との関係を考えるのは無意味であるうか。

韓国特集 韓国演劇の今を訊く4日間

2015年7月4日〜7月7日（東京）／7月9日〜7月12日（松山）
会場：レイホール・コート参加者スタジオ、芸術花伝舎（東京）／シアターねこ（松山）
講師：ユン・ジョンファン 尹正徳
翻訳：「ちゃんぼん」津川泉 通訳：金重裕 指導：川田豹 佐川大輔 望野哲也 洪明花 和田善夫 制作：一般社団法人日本演出者協会
主催：文化庁／一般社団法人日本演出者協会 共催：「その法」ネットワーキングえひめ 国際演劇交流セミナー2015 in 松山実行委員会
文化庁委託事業 平成27年度次代の文化を創造する新進芸術教育成果事業

小劇場で話題のコメディを上演しながら、大劇場ではノン・パバル劇で韓国のみならず世界中の観客を楽しませる。さらに障害者劇団との長い協働活動で、斬新な「ゴドーを待ちながら」を作り出す。マルチに活躍する劇作家・演出家のユン・ジョンファンは、言語の壁、文化の壁：さまざまボードアをどのようにして乗り越えるのか？

その俳優指導法とは？ 名作『ちゃんぼん』を4日間、参加者による台本を手を持った状態での上演まで持つていく。さらに、彼の作品群をビデオで鑑賞し、韓国演劇界の今を知る。

東京、松山とも、初日にまず彼の演劇に対する考え方を聞いた。小学生時代から彼は詩人になりたかったという。詩は説明ではない。説明し、理解させること、表現し、感じさせることの方がいい。彼が詩人から劇作家となり演出家となっても、それは変わらないテーマであった。



だから、光州事件を扱った彼の『ちゃんぼん』をテキストとしたワークショップも「社会性のあるコメディ」というだけでは終わら

ない。参加者に求められたのは「ちゃんぼん」を読んで自分が受けた「感覚」……たとえは温度、味、音など……を、今度は観客に「感じさせる」ようにする、その方法を考えることだった。

参加者は数グループに別れ、「ちゃんぼん」のそれぞれの場を担当し、思い思いの方法で「感覚を感じさせる」実験を繰り返した。そして最終日に通し上演を行った。

もうひとつ、戯曲分析、あるいは役作りの指針とするよう求められたのは、その人物の「目的」は何か？ ということだった。ユン・ジョンファンは「感覚」「目的」というシンプルな言葉と指示で、じつに複雑で大量の内容を含む作品を、私たちに短期間でたたき込んだ。「自分が感じたことを、観客にも感じさせよ」という一言に、自分の全活動を集約させた。見事な指導技術だった。

東京、松山、どちらの参加者も非常に熱が入り、各人得るところの多いワークショップとなった。

ロシア特集

現在、ロシアで最も重要な演出家セルゲイ・ジェノヴァチ氏による次世代を担う若手演劇人のためのワークショップ

2015年7月22日～7月26日
会場：BRICKYARD (名古屋)
講師：セルゲイ・ジェノヴァチ (Sergei Zhenovach) パネラー：安住恭子、小島祐未子
通訳：山崎芳子アナ、丸知亜矢、喜藤敬明、木村英、菊本健郎、前川達次郎、金子康雄、小熊ヒロシ、神谷尚貴、ほりみか、森秋音
制作：一般社団法人日本演出者協会 主催：文化庁「平成27年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」
文化庁委託事業「平成27年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

今回で3年目のセルゲイ・ジェノヴァチ氏のワークショップは5日間という短い期間でしたが、今まで以上に充実したセミナーになりました。

1、2年目はドストエフスキの作品を使用し、今回はチエーホフの短編小説『魔女』『たむぐれ(いたずら)』の2作品を取り上げました。どちらの作品も1866年に書かれたもので、チエーホフが大学を卒業したばかりの26歳頃に書いた小説です。短い作品ということもあり、受講生がより集中して作品の本質に触れることができたと思います。

ジェノヴァチ氏の詳細なチエーホフの経歴、ロシアの時代背景、ロシア人気質など日本人だけで作品を読み解こうとすると気付くことのできない、見落としてしまいがちなチエーホフ作品の奥深さ、面白さを経験できたセミナーでした。

戯曲ではなく小説を使用するのは、作者からの与えられた状況が詳細に提示されている



ことが多く、スタニスラフスキー・システムをより有効に学ぶことができるからでもあります。

ジェノヴァチ氏と受講生達の積極的なアプローチにより、分析しエチュードを通して体験、さらにまた分析してエチュードに挑戦するという「行動分析のメソッド」を有意義に学べたセミナーでもありました。

最終日にはパネラーに演劇評論家の安住恭子さん、小島祐未子さんを招いてシンポジウムを開催し、日本とロシア演劇の現在について話し合いました。また、シンポジウムの中ではジェノヴァチ氏が芸術監督を務める「舞台芸術スタジオ」の舞台作品もビデオ鑑賞しました。セミナー受講後の参加者達からも様々な質問があり、各々の受け止め方も興味深かったです。

ジェノヴァチ氏のセミナーは3年目をもって一旦終了ですが、また機会があれば是非開催したいと思います。

国際演劇交流セミナー2015
報告 II 丸知亜矢

フランス特集

ピエールさんと音楽劇をつくりませんか？

2015年8月19日～8月23日
会場：芝能花伝舎 (東京)
講師：ピエール・ノット (Pierre Notte) パネラー：篠崎光正、青井勝彦
通訳：山上優 (ウケシヨウ)、片岡史子 (シラタケ)、担当者：篠本賢一、広田豹
協力：親世葉子、ラウオー真知子、根岸徹郎 八木雅子、制作：一般社団法人日本演出者協会
主催：文化庁「平成27年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」
文化庁委託事業「平成27年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

ピエール・ノット氏は、フランス演劇界において、劇作家、演出家、俳優、音楽家として、創作の現場に深く関わるとともに、演劇批評家としての顔も併せ持ち、さらに、コメディ・フランスセーズの事務局長という経歴をもつ。ノット氏は、フランス演劇界ではなかなかヒットしない音楽劇というものを『レ・ミゼラブル』もヒットしなかった、氏のオリジナル曲による音楽劇でヒットさせ注目されている。氏の音楽劇の代表作『私もカトリーヌ・ドヌーヴ』の楽曲、セリフを題材に4日間のWSを行い、5日目にはその成果の発表と「音楽劇と演劇教育」というシンポジウムを行った。

ノット氏は、演劇において「家族」というものは重要な要素であり、今日の家族の姿を模索することは、現代の人間社会における諸問題を根幹から検証することにつながるかと考える。

WSでは、コミュニケーションの柔軟性を図るウォーミング・アップのうち、参加者に歌を1曲用意させ、それを使って即興エチュードを行った。参加者が用意した歌は様々である



が、それを「墓」の前で歌わせる。歌い方は、墓に眠る故人との関係性や他の参列者との関係性によって規定されるが、その深刻な状況が、歌われる歌詞とのギャップを生み出し、喜劇へと化学変化していく。演者のシリアスな内面が観客にとって、ユーモラスなものになる。こういった二重性が氏にとっての基本的なドラマの在り方だ。

『私も…』を使ったシーン・スタディでは、対話部分と劇中歌にスポットを当てた。歌はもともと、登場人物が歌う設定なのだが、今回のWSでは、参加者のコーラスによって行われた。家族の闘争を描くセリフのやりとりが、歌になる瞬間の飛躍に、様々なドラマの可能性がある。用意された歌詞の翻訳について、参加者からの新たな提案などもあり、劇中歌について考察するきっかけにもなったようだ。

シンポジウムでは、ノット氏の「観客である努力」という演劇論も披露され、現代フランス演劇界でユニークな活動を続ける氏の演劇に深く触れることができた5日間となった。

国際演劇交流セミナー2015
報告 II 篠本賢一

パレスチナ特集 パレスチナの演劇を体験しよう！

2015年8月2日・5日(東京)／8月6日・8月9日(郡山)
会場：芸術伝舎(東京)／郡山市青年文化会館(郡山)
講師：イハブ・ザハダ (Ihab Zaidieh) リーディング演出・執筆よりえ、岩田豊
翻訳：Cin 柳谷あゆみ、Pwter in a Camp、Uthra Artists、中山豊子
通訳：渡辺真帆、担当：林英樹、佐藤茂紀、加藤明美、公家隆幸、鈴木紀子、佐々木雅彦、制作：一般社団法人日本演出者協会
主催：文化庁／一般社団法人日本演出者協会、文化庁委託事業、平成27年度次代の文化を創進する新進芸術家育成事業

生まれた時から占領が続く土地で生きる人々にとって演劇や舞台芸術はどのような意味を持つのだろうか？

今回のパレスチナ特集ではヨルダン川西岸地区へブロン市でコミュニティと密着した演劇活動をし、同時に近年ではパレスチナを代表する劇団としてアラブ社会でも存在感を示すイエスシアターの俳優・作家・演出家のイハブ・ザハダ氏を招聘、東京と郡山でセミナーを実施した。東京では彼らの代表作『3 in 1』、郡山では難民キャンプの子供たちと共同創作された『難民キャンプの芝居』をベースにワークショップ参加者とともに再構成し発表。並行して『3 in 1』のリーディ



ング上演も実施した。

パレスチナではいつ終わるとも知れない占領と日常的な緊張状態の中で特に若者たちは明日への希望を見失いかけていているという。自分が生きている意味、価値、自分たちの存在自体が否定される環境において、ザハダ氏たちの演劇活動は生きる意味の再発見と世の中にあることのおかげがえのなせ、そして他者からの承認、「私たちはここで生きている」ということを表明する場になっている。それは上演活動に留まらない。地域の学校と彼らの劇場との緊密な連携により多くの若者たちがワークショップを通して直接演劇に触れ自ら体験している。

8月6日に福島県(郡山)に到着したザハダ氏はその日のFacebookに演劇人独自の想像力から「第二次世界大戦で広島に原爆が落とされた日に福島にて、放射線と地震とすばらしい演劇集団」というコメントを寄せた。

日本とパレスチナ、遠くにあるが演劇とその想像力を間に挟むと、とても身近な存在に変容する。参加者はその事に驚いたようである。演劇の力と交流の意味がとてもクリアになる経験となったことは確かだ。

オーストラリア特集 演劇の可能性を巡る5日間！

2015年9月22日・9月25日、27日
会場：芸術伝舎(東京)／芸術劇場5F シンフォニスベース(東京)
講師：オーブリー・メロー (Oubrey Mellow) 公開討論進行・藤崎周平、安宅りさ子
通訳：コフィー・ネター、須藤鈴、通訳：三輪みづ花、中山豊、角田美知代、担当：和田喜夫、佐々木治己
主催：文化庁／一般社団法人日本演出者協会、共催：東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)
文化庁委託事業、平成27年度次代の文化を創進する新進芸術家育成事業

演劇人の養成、教育について何を基底にすべきかと、何年も考えられ、国際演劇交流セミナーでもひとつの柱として、世界中から講師を招聘し紹介してきた。その中でもシドニーの国立演劇学校(NZYT)の校長を務め、現在ではシンガポールのラサール芸術大学舞台芸術科の学部長であるオーブリー・メロー氏には

何度も招聘に応じていただき、ワークショップ、レクチャーを開催してきた。今回は、メロー氏が考える演劇人としての基底となるワークショップ、レクチャーを協会員からの全日参加は難しいという意見を反映させ、単日のみの受講を基本にしたワークショップを開催することとなった。対象は演出家、劇作家、俳優のみならずプロデューサーなどを視野に入れ、演技法の論理的なアプローチ、多くの演出法、海外で活動するための方法や例を元に実演を伴うワークショップやレクチャーとなった。また、最終日はレクチャー&公開討論として、メロー氏から演劇教育への提言、そして藤崎周平氏(日本大学芸術学部演劇学科教授)、安宅りさ子氏(桐朋学園芸術短期



大学教授)の両名から日本の演劇教育の現状と課題を含めて公開討論を行った。

オーブリー氏のレクチャー、ワークショップでは理論的であることはもとより俳優の演技法について視覚的にも捉えやすいアプローチとなっていた。「印象派の演技」と題されたワークショップでは、点描画法が引き合いに出し、近くで見ても分らないが遠くからなら分かるような全体の描き方を考察した。演技はひとつの目的に収束させるのではなく、多様なコントラストを盛り込むことで演技が現れるという具体的なテクニックとして紹介された。演出家の方法としてはポストモダン以降の思想によって、構成、解釈、構築される劇世界に対して批判的でありながらも、どのような可能性を探っていくかということを示していた。メロー氏の演劇人の養成とは、具体的かつ批判的な視点を持ちながら探求を忘れないことだと一言にまとめてしまうことは憚れるが、メロー氏はそのような姿を私に見せ続けた。

デンマーク特集

2015年11月6日、11月24日、11月29日
 会場：芸術花伝舎/東京芸術劇場5Fシンフォニーホール（東京）
 講師：クリスティアン・ロリケ（Christian Lollike）、マス・マザンチ・イエンセン（Mads Mazarhi Jensen）
 村井雄（シンポジウム司会）、高橋宏幸（翻訳）、Robert Skjold, Mads Mazarhi Jensen、進取、岩崎雄大、家田淳、担当：佐々木治己、広田豹
 主催：文化庁/一般社団法人日本演出者協会、共催：東京芸術劇場（公益財団法人東京藝術大学文化財団）
 文化庁委託事業「平成27年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」 助成：STATENS KUNSTFOND

1972年から続くコペンハーゲンの先鋭的な劇場 Sort/Hvid (旧 Cafe Theater) 芸術監督クリスティアン・ロリケ（劇作家、演出家）とマス・マザンチ・イエンセン（劇作家）を招聘し、ノルウェー連続テロ事件を題材にした話題作『マニフェスト2083』（クリスティアン・ロリケ作/演出）の上映会、同作のリーディング（村井雄演出）、「ノーマルライフ」（クリスティアン・ロリケ作、保木本佳子演出）、「予定通りの出発」（マス・マザンチ・イエンセン作、青井陽治演出）の3作品のリーディング上演を行った。最終日は、ロリケ氏より「デンマーク演劇：政治とポストドラマ」を中心にレクチャーが行われ、その後は、2人の招聘講師と、リーディング上演の演出を行った3人の演出家を交え、「現代演劇の課題、自主規制について」と題してシンポジウムを行った。



今回、Sort/Hvid 劇場から2人の講師を招聘したのは、『マニフェスト2083』という作品が抱えた社会と演劇の境界を講師と共に考えることが有意義だと考えたためである。他国の事件であり、被害者の家族も生き延びる中で、また、現在、意識的、無意識的に「正しさ」を裁断する市民社会的な演劇の「公共性」の中で、テロリストに対し、「わたしと彼は何が違うのだろうか？」と問いかける作品は、ただのスクリーン・ドラマであると決めつけることはできない。実際に、彼らの上演は罵詈雑言によって迎えられることが多かったという。なぜ、彼らがそのような舞台を作り続けるのか。幸せの国代表のように語られるデンマーク、しかし2人の講師からはディスピアとしてデンマークが語られる。そしてそれはデンマークに限ったことではないだろう。リーディングで扱った他2作品においても、私たちが無条件に受け入れる平穏な社会が何を生んでいるのかと問いかける。彼らは演劇の手法そのものにも疑義を呈しながら、どのように作品を作るのか示していく。現在、演劇を行うということ、それ自体が、社会と密接に繋がる行為であることが示されたセミナーとなった。

国際演劇交流セミナー2015
 報告 佐々木治己

メキシコ特集

2016年1月9日、1月13日（東京）/ 1月15日、1月17日（大阪）
 会場：芸術花伝舎（東京）/ 座、九条（大阪）
 講師：ダビッド・オルギン（David Orlain）、ゲストスピーカー：吉川恵美子、高橋宏幸
 通訳：棚瀬あずさ、担当：川口典成、佐々木治己、田中孝弥
 主催：文化庁/一般社団法人日本演出者協会、文化庁委託事業「平成27年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

日本演出者協会国際部としては初となるメキシコ特集は、2016年1月に東京と大阪で開催された。招聘講師はダビッド・オルギン氏。CENART Escuela de Teatro（国立芸術監督センター演劇学校）に所属する劇作家であり演出家である。

レクチャーと俳優向けワークショップとの2本立て。レクチャーでは、まずはメキシコの歴史についての講義から始まった。カルチャーセンターのようであるが、オルギン氏の演劇は自身が語るように、「メキシコの歴史と切り離せない」。スペインのエルナン・コルテスによる征服以降、メキシコ古来の、メキシコにオリジンがあると言える芸能は、根こそぎ破壊されてしまったのであり、メキシコ演劇が形作られていくのは、スペイン演劇の伝統やオソリテイとの関係のなかであった。演劇という共通の基盤で語り合う中で、このような宗主国従属国という政治的あるいは地理的な権力関係を問われていることに改めて気付くとともに、「伝統」演劇をどのようににそれぞれの演劇観の中に位置付けるかが非常に重要なことだと知らされた。また、ダビッド氏が、いま、メキシコでもポストドラマ演劇がひとつのトレンドになっており、演劇から言葉と俳優（の関係）が喪失しているのではないかと指摘していたのが興味深かった。



ワークショップでは、共同体におけるコードから「自由」な関係をいかに作るか、ということにコンセプトが置かれていた。印象的だったのは、ワークショップの始まりに、1時間半ほどかけて、ダビッド氏が行うワークショップのコンセプトについて解説がなされたことだ。ジョルジュ・ディディューベルマンの『蜜の残存』というエッセイに触発されたダビッド氏の演劇論である。ぜひ今年度末に発行される国際部の冊子をご覧いただければと思う。

国際演劇交流セミナー2015
 報告 川口典成

総会報告

一般社団法人 日本演出者協会 事業担当者名簿

2016年9月現在

毎年恒例の総会は例年の8月下旬よりも早い8月上旬に開催され、また会場も芸能伝舎ではなく、淀橋会館で行われた。今回は理事の改選年にあたり、理事選挙の結果も報告された。議長は、和田喜大理事長が務め、開会宣言とともに、当日の午前中に開催された理事会において承認された議案について、審議報告がなされた。

平成27年度一般社団法人日本演出者協会定例総会

時：2015年8月9日（日）
13時～17時
所：淀橋会館

議事

1. 2014年度活動報告
2. 2014年度会計報告
3. 2015年度事業計画
4. 2015年度予算計画
5. その他（地域ブロック報告）
6. 役員改選投票結果

2014年度活動報告は「演劇大学」「国際演劇交流セミナー」「若手演出家コンクール」「日本の近代戯曲研修セミナー」ともに昨年度よりも活発な活動報告となり、各事業の成果が報告された。

海外研修員の推薦は、鈴木アツト会員に決定、研修先はロンドン。会計報告では、一般会計、特別会計ともに順調な結果を残したが、会費未入金に関しては、今回も解決できずに課題として残った。

各団体からの助成金については、昨年度を上回る結果を残した。また、ブロック報告として、東海ブロック、関西ブロックから詳細な活動報告がなされた。理事改選投票結果も報告がなされた。

理事・役員一覧

【理事長】和田喜大
【副理事長】宮田慶子、流山児祥
【常務理事】大西一郎、小林七緒、西沢栄治、日澤雄介

【理事】青井陽治、岩崎正裕、鶴山仁、菊川徳之助、鴻上尚史、齋藤歩、坂手洋二、佐藤茂紀、田中孝弥、西川信廣、はせひろいち、ふじたあさや、松本祐子、山田恵理香
【理事・事務局長】大西一郎、小林七緒

事業担当一覧

○演劇大学【部長】小林七緒（北海道）斎藤歩（北陸）井上ほーりん（東北）坂田裕一、佐藤茂紀、高橋純、新田満、吹雪ヒユン（関東）スズキ拓朗、土田英生、西垣耕造、西沢栄治、日澤雄介、宮田慶子、流山児祥（東海）平塚直隆、鹿目由紀（関西）岩崎正裕、木嶋茂雄（四国）岡田敬弘、吉本千賀子（九州）大場久路、清末典子、木村佳南子、田坂哲郎、山下キスコ、山田恵理香

○国際演劇交流セミナー【部長】

篠本賢一【事務担当】前嶋のの（北海道）前田透（北陸）岡井直道（東北）伊藤み弥（関東）青井陽治、家田淳、大橋宏、貝山武久、川口典成、黒川逸朗、小林拓生、坂手洋二、佐川大輔、佐々木治己、左藤慶、杉山剛志、オニ、土山紘史、中野志朗、林英樹、広田豹、洪明花、三輪えり花、森井睦、山上優（東海）佐久間広一郎、ほりみか、丸知亜矢、本島勲、小熊ヒデジ、前川達次郎（関西）井之上淳、今泉修、坂手日登美、島守辰明、全リンド、田中孝弥、棚瀬美幸、土橋淳志、堀江ひろゆき、山口浩章（九州）五味伸之、日下部信、山田恵理香

○日本の近代戯曲研修セミナー

【部長】青井陽治（北海道）清水友陽、田中春彦（東北）渡部ギユウ（関東）川口典成、黒川逸朗、黒澤世莉、篠本賢一、中村孝夫、林英樹、丸尾聡（東海）齋藤敏明、菊本健郎、はせひろいち、岡田一彦（関西）井之上淳、笠井友仁、金子順子、菊川徳之助、木嶋茂雄、田中孝弥、棚瀬美幸、椋平淳、森本景文、山口浩章（九州）山田恵理香、山南純平

○若手演出家コンクール 大西一

郎、小林七緒、西沢栄治

○教育・出版 坂手洋二、佐々木治己、篠崎光正

○広報【部長】秋葉由美子（関東）大西一郎、柴原秀一、篠崎光正、篠本賢一、藤間健、三谷麻里子、緑川恵仁、流山児祥（東海）ほりみか（関西）木嶋茂雄、田中孝弥、菊川徳之助（四国）鈴木美恵子（九州）糸山裕子

○法務 西川信廣、鶴山仁、小林七緒

○地域交流（東北）佐藤茂紀、なかじょうのぶ、渡部ギユウ（関東）鴻上尚史、流山児祥（東海）はせひろいち、水野誠子（関西）岩崎正裕（九州）村山精一、山田恵理香

○観劇案内（関東）遠藤栄藏（東海）金子康雄（関西）木嶋茂雄

○日韓演劇交流センター シライケイタ、松本祐子

○事務局（関東）秋葉舞滝子、荒川貴代、上田郁子、齋藤由夏（東海ブロック）金子康雄（関西ブロック）木嶋茂雄

理事會報告

2015年2月10日(火)

12時~13時15分

場所:協会事務所

出席者:青井陽治、小林七緒、和田喜夫、大西一郎 4名(委任15名)

1. 演劇大学(くだまつ、にいがた)
2. 日本の近代戯曲研修セミナーin東京

3. 若手演出家コンクール最終審査会
4. 年鑑「国際演劇交流セミナー2013」編纂
5. 国際演劇交流セミナー(韓国、オーストラリア)

6. 国際交流基金からの助成
- 《その他》領収書について、監査の予定、文化庁・第4次文化審議会への提言

2015年3月30日(月)

11時~13時

場所:協会事務所

出席者:青井陽治、瓜生正美、木村繁、菊川徳之助、小林七緒、篠崎光正、篠本賢一、西沢栄治、山田恵理香、流山児祥、和田喜夫、貝山武久 12名(委任9名)

1. 2015年度事業内容の確認
2. 若手演出家コンクール、コンクール記念公演
3. 韓国演出者協会主催アジア演出家展
4. 「D」14号について
5. 日韓演劇作品交流プロジェクト劇団昌世公演

2015年4月22日(水)

11時~13時

場所:協会事務所

出席者:青井陽治、瓜生正美、岩崎正裕、小林七緒、坂手洋一、篠本賢一、流山児祥、和田喜夫、貝山武久 9名(委任15名)

1. 日韓演劇作品交流プロジェクト劇団昌世公演、2016年の同プロジェクトについて
2. 事業担当理事について
3. ソウル演劇祭入スズキ拓朗氏公演
4. 韓国演出者協会主催アジア演出家展
5. 演劇大学(にいがた、福岡)
6. 日本の近代戯曲研修セミナーin札幌

- 《その他》協会誌「D」14号、演劇大学の事業費謝金、芸能花伝舎との契約更新、日韓演劇交流センター、「戦後関西新劇史」出版希望、「しのだづま考」について

2015年5月15日(金)

11時~13時

場所:協会事務所

出席者:青井陽治、瓜生正美、大西一郎、菊川徳之助、小林七緒、篠崎光正、篠本賢一、西沢栄治、宮田慶子、和田喜夫、貝山武久 11名(委任11名)

1. 演劇大学inにいがた
 2. 日本の近代戯曲研修セミナーin札幌
 3. 国際演劇交流セミナー 韓国特集
- 《その他》総会について、若手演出家コンクール2013記念公演+日韓演劇作品交流プロジェクト、ソウル演劇祭入スズキ拓朗氏公演、2016年日韓演劇作品交流プロジェクト、会員の旅公演チラシのDM同封、ソウル演劇祭の存続について、「しのだづま考」について

2015年6月9日(火)

11時~13時

場所:協会事務所

出席者:青井陽治、鶴山仁、菊川徳之助、篠崎光正、篠本賢一、宮田慶子、和田喜夫、貝山武久 8名(委任14名)

1. 2016年度の演劇大学について
 2. 演劇大学(Suzuki、内子)
 3. 国際演劇交流セミナー(オーストラリア、韓国)
 4. 若手演出家コンクール
 5. 日本の近代戯曲研修セミナーin札幌
 6. ソウル演劇祭入スズキ拓朗氏公演報告
 7. 協会誌「D」進捗報告
- 《その他》日韓演劇交流センターへの派遣、演劇大学講師の謝金、総会について、「しのだづま考」について、演劇を広めるための意見

2015年7月7日(火)

11時~13時

場所:協会事務所

出席者:瓜生正美、大西一郎、菊川徳之助、小林七緒、篠崎光正、篠本賢一、西沢栄治、宮田慶子、和田喜夫 9名(委任11名)

1. 演劇大学(Suzuki、内子、さかいで、福岡)
2. 国際演劇交流セミナー(韓国、フランス、パレスチナ、オーストラリア)
3. 若手演出家コンクール
4. 日本の近代戯曲研修セミナーin札幌
5. フェニックス・プロジェクト
6. 日韓演劇作品交流プロジェクト

《その他》文化庁ヒヤリング、文化庁への提案(書籍の助成、地域格差、学校教育、育成係の担当者人員)、2106年度事業について、日韓演劇交流センター

2015年8月9日(日)

11時~13時

場所:協会事務所

出席者:青井陽治、瓜生正美、大西一郎、小林七緒、篠本賢一、西沢栄治、宮田慶子、和田喜夫、外波山文明、福田悦雄、松本祐子 11名(委任12名)

1. 演劇大学(Suzuki、内子、さかいで、八戸、福岡、きたかみ)
 2. 国際演劇交流セミナー(フランス、パレスチナ、オーストラリア)
 3. 若手演出家コンクール
 4. 日本の近代戯曲研修セミナーin札幌
 5. フェニックス・プロジェクト
 6. 日韓演劇作品交流プロジェクト(韓国作品公演、弦巻啓太氏公演)
 7. 協会誌「D」について
- 《その他》2016年度事業について、文化庁在外研修応募、総会の進行について

2105年8月22日(土)

11時~13時

場所:協会事務所

出席者:青井陽治、大西一郎、菊川徳之助、西川信廣、小林七緒、和田喜夫、松本祐子、流山児祥 8名(委任5名)

1. 理事会新体制について
- 役員選挙の結果、理事14名が決定。
- 和田喜夫氏110票、坂手洋一氏83票、宮田慶子氏78票、流山児祥氏77票、鶴山仁氏70票、小林七緒氏69票、青井陽治氏60票、鴻上尚史氏59票、ふじたあさや氏57票、西川信廣氏55票、大西一郎氏49票、松本祐子氏49票、菊川徳之助氏45票、岩崎正裕氏45票

《その他》人事について、事業について、「安全保障関連法案」集团的自衛権行使を認める閣議決定」の撤回を求めるアピールへの賛同決定

在外研修報告「韓国国立劇団」

2014年1月～2015年1月

洪明花（ほんみよんあ）

ソウル駅にある韓国国立劇団は、もと軍隊の倉庫を改築した真っ赤な建物で、敷地に足を踏み入れただけで体中の血が騒ぎます。2014年1月、極寒のソウルに降り立ち、ワクワクしたのもつかの間、私が参加した俳優育成プログラムの訓練はまさに軍隊でした。毎日朝10時から夜10時まで、体から塩が出るほどの汗を流しながらの体力勝負。とにかく筋トレ筋トレ、また筋トレ。各授業は3時間で休憩10分。ダンス、ボイトレ、身体の追求、ヨガ、パンソリ、演技、台詞の分析、美術。

とにかく体力と精神力の勝負で、私は「もうしてキム・ヨナが生まれたのね」と眩きながら自分にムチ打つ日々でした（笑）。

演技の基礎は、メカニック、テクニック、ドラマティック、ダイナミック、ポエティック。即ち身体を鍛えてこそ技術や表現力を加えることができるという論理は、なるほど納得。私の体が見るみる柔軟に、そして強固になっていくことに、人間の身体の無限性を身を持って感じました。厄介なのは「頭」でした。ビックリするほど頑固なのです。どこかでいい格好しようとしてしまっている自分からやっと抜け出したのは、モノローグの発表でした。5～10分程度のモノローグを創作するので、それだけでも大変なのに、ネイティブでない私は、どうしても正確な発音にとらわれて肝心な感情の動きや表現



を見失ってしまい、何より心が動いていないのだから演じていても楽しくない。これではだめだと気づき、最終的には「もういいやー」と発音を捨て、とにかく体当たりで表現しました。結果は、まあひどいものでした。ただ、私自身はものすごく楽しかった！そしてなんと、作品としてはクラスで一番面白かったと言ってもらえたのです。これは本当に嬉しかったです。

訓練最後は、国立劇場でチエーホフの『プラトノフ』を上演しました。とても重要な役をもらい、私自身忘れることのできない挑戦になりました。感心したのは俳優たちが果敢に挑戦する姿です。とにかく攻めています。ひるまない姿勢に大きな刺激を受けました。今回の韓国留学で私が得たものを一言で言うなら「勇氣」です！

学んだことが役に立つかどうかは、これからの私次第だと思います。ただ、この「勇氣」が今後の私の動力になることは間違いないと思います。



▲骨盤呼吸の自主練風景

部会だより

【国際部】

国際部員は、東京以外にも各地で活発な活動をして下さる部員がいっぱいなので、毎年、円滑に事業を展開することが出来ます。しかしながら、我々ひとりひとり現場を抱えた演出者ですから、毎月1回、部会のための時間を確保することは困難です。ましてや地方から打合せのためだけに東京に来ることは、なかなか難しいものがあります。1日仕事、場合によっては、2日間、部会の2時間のために体を空けなければならぬからです。東京在住部員と地方部員とのこのギャップを埋めるために今春から、スカイプによる会議参加を試みています。協会事務所まで足を運べない部員にとって有効な方法のようです。最初は月面と地球が交信するようになくわく楽しい時間でしたが、今では、この方法の有効性を誰もが実感しています。東京の白熱した議論に大阪の部員がPC画面から参加する、現在の国際部会ではこのような状態となっているのです。文明の利器って凄いですね。

（篠本賢一）

【広報部】

今年度より、広報部長を務めることになりました。まだまだ未熟

者ですが、宜しくお願いたします。昨年度の活動状況の反省を踏まえて、手探りながらも広報部と理事会の協力体制を構築しながら、より『D』を魅力的な協会誌にするべく、部員一同協力して編集作業にあたっています。また、新たな試みとして、協会公式Facebookページの作成・運用を開始しました。少ない人数での運営で、全ての事業に取材に行ける訳ではないのが心苦しいところですが、記録として形に残せる『D』と、リアルタイムに発信できるFacebookページのそれぞれの良さをうまく活用していけたらと思っています。広報活動を通して沢山の人の繋がりが出来るのが、広報部の魅力です。あなたも広報部の一員として一緒に活動しませんか？ 入部希望者、大歓迎です！ お気軽に協会事務局までお問い合わせください。

（秋葉由美子）

【教育出版部】

深刻な出版不況はさらに広がりをみせているが、当協会の出版もままならない。助成金も困難な状況が続いている。ここ数年ミュージカルの専門書を出版する計画を出版社に持ち掛けているが、演劇書と聞くだけで全く取り上げてもら

えない。演劇関係の出版物をネットで調べるだけでも激減している現状を肌で感じる事ができる。また、古本の世界も同様である。さっぱり動きがないというだけあって、戯曲が100円で売られている。一方演劇の教科書については各方面で実に様々な動きが出ているが、これらもまた当協会の教育出版部が取り扱う課題である。しかし教科書ということになると、話は別で大手がこぞって水面下の動きを見せてくる。社会貢献活動として「いじめ防止啓発教育劇」と命名した演目を中学校で上演しているが実はその反響に驚いている。出演は大学生だが各方面から注目され、その思いもよらない大きな反響から演劇の新たな活用場が広がってきているのを実感している。この教育劇に関する内容から演劇科目の教科書としてのアプローチも始まっている。「演劇を観たことがない」という一般大学生の数は想像を超える数字になっている。今年度の私の授業では、98パーセント。事態は深刻である。

（篠崎光正）

各地域活動通信

被災地特集

2016年4月に突如九州を襲った「平成28年熊本地震」。

被災地の演劇人は今、何を思っているのか。

東日本大震災で被害を受けた東北の演劇人からのエールと共に、被災地の演劇人の生の声をお届けいたします。

【熊本】

4月14日・16日の震度7を経験した。わが劇団の事務所も半壊に陥り、引越しを余儀なくされた。震災後、演劇活動への本気が問われた。

「それどころではないだろう」と心配する声もあったが、男おいどんは演劇は生活そのものと気づくこともできた。

あれから3か月半。ニュースではあまり取り上げられていないが、公共ホールや劇場の再建に注目していた。それにも震災が起きた時間が夜中だったこともあって、人が集まる場所＝劇場での死者やけが人が出なかったことは救われた。ホールの天井板の落下やび割れなどの被害を受けた数多くの劇場では公演中止なども続いていた。震源地に近い劇場は

再開の目途が立っていないところもある。避難場所として長く使われていた劇場もあった。又、新たな動きとして、目的に応じた寄付金募集も始まった。その例として熊本県立劇場では文化事業に募金が活用される。熊本市では「くまもとエンタメ支援金」も開設された。これは復旧費に充てられる。

熊本市市民会館では大ホールの天井の破損に伴う落下物、客席の亀裂などが見られ大規模な工事になるといふ。震源地の益城町にある文化ホールは建物の骨組みの歪みや周辺の地盤沈下などで危険な状態となり安全性が確保できるまでは使用できなくなった。

劇場の安全対策として耐震性や消防法の規制が厳しくなるだろう。人の命を守るためという点に於いては理解できるが、同時にテロ対策や表現への介入を巡って警察の監視も強まるのではないかとこの危惧もある。震災に乗じて起こるであろう今後を注視したい。

(山南純平)

SASHYORI Art Revival Connection KUMAMOTO (SARC) は、これまでに熊本市東区の避難所10か所と益城町の小学校に週1回ペースで訪問した(8月1日現在)。そこにいる人との交わりの中で、体操をすることもあれば、おしゃべりをしたり、

社交ダンスを教わったり、マツサージをしたり、将棋、トランプ、折り紙をしたりすることもある。無料のコーヒーマシヨップも開く。身体を動かすことが適わない人もいて、心を動かし大きな笑顔が生まれる瞬間が最大の喜びだ。

ある避難所では避難者からの発案で「はないちもんめ」をやった。30代から92歳までの女子による「はないちもんめ」。童心に返り一喜一憂した。「今日のことは一生忘れません」と言ったご婦人の笑顔は私たちの宝物だ。

道路からすつかり中が見渡せる理容室。前日まで営業していたであろう姿が壁の崩落により露になっているのを見て強い衝撃を覚えた。避難所でも出かい60年間理容師をしてきたおじいちゃんにハサミを握ってほしい。何回かの訪問を経て、「お仕事で髪を切ってくださいねですか?」とお願ひした。

「いいよ」と二つ返事で承諾いただき、避難所のトイレで前髪を切っていた。お金を出そうとした私に「ポランティアだよ」とニカツと笑われたその笑顔は眩しかった。

絶望から立ち上がることは容易なことではない。人が涙する姿を震災後どれだけでも見ることが。私たちがとの時間で少しでも気持ち楽になり、心から楽しいと思える瞬間を作り出すことで心を

解きほぐすことができればと願っている。大きな笑顔に出会えた瞬間、私たちが負けないくらい最高の笑顔でいるに違いない。

(松岡優子)

【大分】

2016年大分の演劇の上半期は「宝のまち・豊後UNMA芸術祭」事業「UNMA演劇祭」から始まった。2月13日・14日の両日、演劇集団Pants、舞台創作コロニーBackStage、劇団水中花、大分豊府高校演劇部「豊劇」の4団体が出演した。豊府高校は2015年全国高等学校演劇大会で最優秀賞を受賞した作品を上演。豊府高校以外は大友宗麟をモチーフに各劇団の持ち味を生かした作品が観客を楽しませた。

そんな中、4月16日熊本・大分地震が発生した。あの、分刻みで起こる揺れの中で夜を明かした日のことを思い出すと今でも身が竦む思いがする。地震後初めての練習で、みんなの顔を見たときの安堵感。そして、再び演劇活動が出来ることへの喜び。6月には日本演出者協会主催の「演劇大学inおおい」が開催された。今年度、節目を迎える団体や劇団が多い大分の演劇人にとって、この上ない大きな刺激になった。一日一日が無事過ごせることの奇跡を思った

上半期だった。(清末典子)

【宮城】

熊本地震から4か月が経過し、今我々は九州地域の舞台人の活動を慎重かつ熱を持って見守っている。東日本大震災の際に「アートリバイバルコネクション東北」を中心に宮城県に集ったアーティストたちが同時期にどのような動きをしていたかというのをふりかえりながら、具体的支援の形を検討かつ実行している。

被災地において常に不足し、常に必要となるモノを端的に挙げるとするなら、それは「人材」と「情報」と「金」である。

残念ながら、三点目に挙げたものは舞台芸術に携わる我々とは縁遠いところもあるが、こちら東北の被災三県、舞台芸術分野において震災復興活動に注力してきたこの5年間の「人材」と「情報」(から生み出されたノウハウ)の蓄積は他地域には例のないものとなっている。これまでの活動の中で生まれたこの掛け替えのない成果を、新たな被災地へ届けることができれば。そういった想いで、東北のアーティストたちは動き出している。(澤野正樹)

あなたは 最近の戯曲出版の激減を どう考え、そのためにどんな 対策を講じていますか？

近年、戯曲の出版が激減しています。私たち演劇に携わる者として、戯曲の出版が減っていることは、深刻な問題だと思えます。わずかに商業ベースに乗る新しい戯曲は、書店に並ぶこともありますが、再版されることは多くありません。最近、日本劇作家協会が『二十一世紀戯曲文庫』を出版し始めましたが、大きな流れを作るには至っていないのが現状のようです。インターネットの青空文庫で過去の作品を紐解くこともできることはできますが、戯曲すべてを網羅しているわけではありません。海外戯曲の新作など驚くほど出版されておらず、若手の劇団の翻訳劇上演がめっきり少なくなりました。戯曲が出版されないのは、戯曲が売れないからだとも言えます。戯曲に限らず本そのものが売れない時代に、戯曲が出版されないこの現状についてのご意見をお聞かせください。(編集部)

北海道 前田透

(紹介者／弦巻啓太)

恐らく私が若いのと、札幌にいるからなのであるが、私が戯曲を買って読むのは、どのような作品が中央や他の地域で上演されているのか、或いは、されていたのか、という情報収集を目的としていた部分もある。しかし、戯曲以外のものでもそうした情報のやり取りが簡単にできるようになった、例えばしcccを使って遠方の舞台を安価で観に行けるし、SNSを介して地域間での情報交換・共有も容易である、公演のDVD化や、映像の配信なども増えた。戯曲を読む、という行為は単に情報収集には留まらないが、表面的な情報が手軽に得られる分、そうしたところに興味を持つ人が減っているのではないかと、そこに到らない分、戯曲を読む必要性を感じないのではないか。

そうした人々に対して、「戯曲を読みたくなる」仕掛けを施さなくてはならない。また、上演の紹介も重要だが、戯曲の紹介もまた不可欠である。出版者や作家の協力が必須ではあるが、上演プランの発表会やコンペディションを開くのも良いかもしれない。他人がどう読むの

か、を知れば、戯曲を読む、ことにも次第に関心が向くようになるのではないかと。

東北(山形) 吹雪ビュン

(紹介者／佐藤茂紀)

出版不況と言われて久しい昨今に限らず、書店で戯曲を探すことは本当に難しいと感じます。少なくとも安価ではないので、おいそれと買い揃えることも難しいです。戯曲探しに図書館の活用もひとつの手段でありますが、地方都市の図書館では偏りも多く、戯曲の揃いは良くはないのが現実です。

DVDなどの普及によって戯曲は(演劇人にとっても)「読み物」としては、縁遠くなってしまうのではないかと感じます。ある意味では戯曲は専門書扱いされていて、一般レベルでは読み物としての面白がり方が分からない、から売れない、故に出版もされないのは当然の流れと理解は出来ます。その現状を良しとは勿論思っています。

ただ、この問題を考えている中で思ったのは、地方(少なくとも私の)では、こつしたこと「問題を視する環境にないこと」がもつと深刻な問題に感じました。

実際、私の周りの仲間の中で

戯曲出版の激減を実感している人間は、いませんでした。現実には、まずは演劇関係者がこつした諸問題に気が付くことから始めなくてはいけないのだろうと思います。

関東(東京) 広田淳一

(紹介者／秋葉由美子)

戯曲出版が減っていることを残念に思っています。ひとつには、日本の演劇が世界から孤立化してしまうという意味で。また、国内外を問わず戯曲発表の場が無くなっていつているのは深刻な文化の低迷を招くことになるだろうと思うからです。ただ、そういった出版物が売れるかどうか、という視点で考えると今後ともそんなに売れることはないでしょう。

国内の戯曲という点に関しては、僕は自分の戯曲を劇団のweb上で無料公開しています。その反響は当初思っていたよりも大きく、僕は上演権も含めて無料という暴挙のようなやり方に出ていることもあって、割りと多くの上演依頼を受けることになりました。少ないのかもしれませんが、需要はあるのです。ただ、それを出版という方法で商業的に成り立たせること

ができるかというと、今後とも

怪しい。そこで僕は有料・無料を含めて、web上で戯曲データを集約するような場所ができていくことを夢想しています。現代において書かれた戯曲はやはりこの時代にこそフィットするものであり、上演が行われるべきだと思っております。

東海(愛知) 小熊ヒデジ

(紹介者／神谷尚吾)

戯曲は売れない、読まれない、という話は、随分前から聞いているように思う。それが今、改めて《激減》しているという設問が出るということは、よほどの状況になっているのか。だが、演劇人口が減っているという話は聞かない。それどころか首都圏では公演の数が多すぎて困るといふ話さえ聞く。演劇人にとって公本は必要だが、《戯曲》は読まなくても、まあ、演劇はできる。ところで、先日のオリンピックでは、卓球やバドミントンの選手が大活躍した。それは、ある時期からジュニア世代の育成に多大なる力を注いだ成果なのだ。そういえばジュニア向け小説はあるが、ジュニア向け戯曲というのはあまり聞かない。必要なのではないだろうか。子供たちが読んで

楽しめる優れた戯曲が。小説等に比べ読みづらい戯曲を演劇人が読まないのであれば、演劇に携わっていない人ならば尚更である。読む訓練が必要なのではないか。現在、名古屋で関わっている『日本の近代戯曲研修セミナー』と『ナビイチリーディング』、ふたつの戯曲関連事業がある。まずは、実りある成果を目指すとともに、考察を深めたい。

関西〈兵庫〉 島守辰明

(紹介者／横山拓也)

昔、大型書店の演劇コーナーに並ぶ戯曲をあれこれと引っ張り出して立ち読みから入るのが楽しみだった。小説などの単行本のように、本の体裁、表紙やタイトルの入り方などわくわくしながら扉を開いたものだったのだ。

戯曲の出版が激減しているという。その昔からそれほど「売れていた」とも思えないが、「長く地道に売れていくもの」として出版されていたのだろう。

兵庫県立ピッコロ劇場には一般に公開されている「資料室」があり、演劇関係書の蔵書は関西随一と言われている。私としては当然ここをフルに活用しており、演劇学校の学生たちにも

せつせとハッパをかけている。

西洋の戯曲に関して原文を知りたい時に頼りにしているのはやはりインターネットである。海外は特にデータベースとして古典を中心に閲覧できる作品も多い。今後、音楽文化と同様、ネット上の戯曲データ配信、などということも増えるのかも知れないが、あらかじめ知っているものをヒットさせる、という方法でしか巡り合えない難点がある。やはり本屋でのわくわく感に期待するには新しいシステムが必要なようだ。

中国・四国〈香川〉 岡田敬弘

(紹介者／越智良江)

日本は資本主義社会なので、ドライな言い方をすれば売れないから作られないというのは当然の事です。逆を言えば売れるなら戯曲の出版は増えるわけで、そうなる演劇の市場をいかに広げていくかという大きな課題と向き合わなければならぬと思います。また、売れないというのは、売ろうとしている人が少ないという見方もできます。営業力がある人が売れば売上を伸ばす事は可能だと思えますし、例えば戯曲を中心に取扱う屋台演劇本屋さんみたいなのがいて、劇団の公演・演劇

フェス・アートイベント・異種展示会等に出店。出店場所によつては戯曲のリーディングなんかもちょうととか、移動型の店舗で戯曲を中心とした書籍の販売及び、戯曲の魅力を伝える為のリーディング企画の実施等を複合しながらやってみるといいのはいかがでしょうか？ 作家が来たときはその作家の作品を中心としたイベントもできますし。ある一定の成果は期待できます。しかし、売上目標をいくら掲げるかによって施策はがらりと変わります。まずは具体的に戯曲をどれくらい売りたいのかを明確化した上で、考えていくべきだと思います。

九州〈福岡〉 中嶋さと

(紹介者／田坂哲郎)

私の劇団は座付き作家がいません。旗揚げ当時は、東京の劇団「ハイバイ」や「東京デスロツク」等の作品を上演していました。当時福岡にはその種の演劇は無かったので、作品を上演したり、劇団の演出家を福岡に招き、ワークショップを開催する必要を感じていました。しかし、近年はそういった中央の劇団も福岡で公演する機会が多くなり、また格安航空チケットで福岡から東京まで観劇に行く事

も気軽にできます。同時代の劇団が上演するものを福岡でやる意味を見い出せなくなりました。そうした経緯を経て、現在は劇団を持たない熊本県在住のフリーの劇作家に新作を書き下ろして頂いたり、古典作品を上演したりしています。

日本演出者協会の Facebook ページが出来ました！

「日本演出者協会 Facebook」で
検索してみてください。

新人会員紹介

2016年11月現在

橋村基子 (はしもらもちこ)



劇団小豆組所属。大学時代より広島に

て劇団活動を始め、2000年に劇団太陽を旗揚げ。一緒に立ち上げた友人が時代劇ファンで、共に芝居作りするうちに時代劇の奥深さにハマる。舞台上立つ傍ら脚本を書き始め、後半は演出も担当。2005年解散まで時代劇を貫く。2006年には演劇引力広島『水曜日の食卓』で微力ながらマキノノゾミ氏の演出助手を務めた。2007年に劇団小豆組旗揚げ。以来、出演しながら全作品の脚本・演出を担当。今も時代劇中心である。作りたいのは、様々な時代に人間ドラマが絡み合った、心を揺さぶり躍動感溢れる舞台。殺陣等の表現を取り入れながら日々模索中である。最近は進路指導寸劇カイダンス(高校生対象)や小学校芸術鑑賞会も手掛けている。

坂本好逸 (さかもとこういつ)

演劇との関わりは、小学校6年生に学芸会で舞台を踏んでからであります。当時の先生や親から殊の



ほか褒められた事で、その深さも知怖さも知

らない純真(?)な少年が虜になってしまいました。未だに迷路でもがいて60年余にも成りましようか。公立文化施設の舞台技術・管理・運営と併せて、アマチュア演劇活動の中で常に「演出」を意識しながらの半生です。地域でのアマチュア演劇、一人芝居、市民ミュージカル等、演出、出演しながらも代表作と言えるものは有りません。せめて一本ぐらいいは「○○○」は私の〜と胸をはって言いたいものです。「日常的に演劇を楽しめる社会」が目標と、遅かな時代を夢見ている男です。秋田県在住。

山上優 (やまがみゆう)



2001年よりフィリップ・ゴリエに師

事。パリのエコール・フィリップ・ゴリエにて講師を務めた後同校の俳優らと作った多国籍ユニットで演出を担当。現在はフランスの現代喜劇の翻訳・演出、即興やクラウンの作品創作も。『TOC TOC トックトック』あなたと少しだけ違う性癖』作ローラン・バフィ

の翻訳・演出(2016)、『ミニトティー、それともレモン...?』ダニエル・ヴァーロー&パトリック・オドゥクール作(2015)、『Cabaret des tous』おバカ達のかばれ。(2014)、岸田國士リーディング『虹色の幻想』『歲月』『モノロオグ』他演出。国際演劇交流セミナーフランス特集での通訳を機に入会。

浦電也 (うらたつや)



舞台芸術等企画団体浦とうふ店/アカシア演劇

指南塾所属。神奈川県平塚市出身。1984年生まれ。役者・演出家。大学在学中、ミヤザキカツヒサ主宰劇団「GSS」に所属。卒業後、2005年に「演劇ユニットP3」を発足。演出を担当。2010年より活動休止。2013年に浦電也ソロユニット「浦とうふ店」を発足。2015年より構成員を加えた「舞台芸術等企画団体浦とうふ店」として活動を開始する。2015年7月より、札幌市アカシア若者活動センターと共同で演劇未経験者を対象とした無料の演劇フリースクール「アカシア演劇指南塾」を設立、講師を務める。2015年より協会員となりました。お見知りおき下さい。

吹雪ピュン (ふぶきびゅん)



1982年山形県生まれ。劇団の所属。芸

名の名付け親は同県出身の劇作家・演出家の後藤ひろひと氏。山形市芸術文化協会会員。山形の演劇振興のため演劇ワークショップを毎月開催中。演劇大学in新潟をきっかけに入会させていただきました。正直、山形の演劇は隣県や中央との交流が希薄で、演劇人にとっても新しい発見や刺激が少ないです。そのため、貴重な講座の数々を山形でもぜひやっていただきたいと思いい、2016年度演劇大学inやまがたを開催していただけることとなりました! 演劇大学および協会に参加することで、地元らしい風を吹かせられるように、その中で私自身も成長できるように努めていこうと思ひます。どうぞ宜しくお願い致します!

村崎佳子 (むらさきよしこ)



平成7年、俳優養成所所属。平成9年、11

年、劇団OZ。平成11年、19年、劇団ウエスト在籍。退団後、事務所に所属しさまざまな公演に出演

弦巻啓太 (つるまきけいた)



弦巻楽団代表、脚本演出を担当しています。

若手演出家コンクール2014で

後、フリーで活動。平成20年からミュージカルカンパニーMUSICを立ち上げ、脚本、演出、企画を手掛ける。パレエとジャズダンスは龍悦代(宝塚歌劇団)、千雅てる子(宝塚歌劇団)、齊藤直美、各氏に師事。歌は間紀美子氏(元宝塚歌劇団指導)に師事。演劇は高波匠二氏(元東宝芸能)に師事。主な出演作『ウエストサイド・ストーリー』『ミュージカル カンパニー』『ピーターパン』『ヒポコ』『ひとひらの雪』『幸せの王子』『美園ユニバース』など多数。主な演出作『ひとひらの雪』『アンネ・フランク』『あの日』『幸せの王子』『朝は来ていたのに』など関西で活動中。大変な世の中になりました。先の見えない、富裕層と貧困層の二極化が進み、世界できな臭い不安な社会。私たちは次の世代に何が残せるのか、日々暗中模索しています。舞台芸術がもっと深く広く、日本の文化に根差し、定着できることを願ってやみません。まだまだ嘴の黄色いひよこですが、皆様のご指導よろしくお願ひいたします。

最優秀賞を受賞し、協会に入会しました。札幌出身です。札幌で演劇活動を始めて今年で二十年、弦巻楽団も活動だいたい十周年です。代表作は『死にたいヤツら』『果実』『ユー・キャン・ト・ハリ・ラブ』『ブレイメンの自由』（作：RWフアスビンダー）など。最優秀賞を受賞した『四月になれば彼女は彼は』は、北海道だけでなく九州を含め全国6か所、韓国でも上演しました。現代性のある演劇の形を日々模索しつつも、あくまでウエルメイドな舞台に仕上げたい。札幌演劇の拡充と刷新を図りながら、観客層を広げていきたい。双子座らしい欲望を抱えた四十歳。

遠藤久仁子 (えんどうくにこ)



二人だけの劇場ゼザン又主宰。劇団すみれ座

ニューカマー賞受賞。主な作品は、三島由紀夫作『班女』、チェーホフ作『プロポーズ』、上野英信作『ひとくわぼり』、真田正子作『花の氷柱』、芥川龍之介作『蜘蛛の糸』、壺井栄作『あばら屋の星』、モリエール作『町人貴族』（今秋公演）。

岡田美香 (おかだみか)



2003年、2008年、劇団トマト座所属、400

イフ・コーディネーター」という肩書で活動中。

才目謙一 (さいめけんじ)

七十年代後半から八十年代前半に活動していた東大の鉄門劇研・本郷劇場出身です。当時のアングラ・小劇場運動に刺激を受けた者の一人です。様々な公演に接する中、とりわけ旧真空鑑を立ち上げた豊川潤さんや新建二郎さん、春秋座の濱本達男さんらとの交流から私の演劇的感性の基盤が形成されました。当時の演劇が(郷愁ではなく)明日を拓く「力」を持っているのではないかとの確信から、今日までの演劇シーンに対して緊張関係を保ち続けてきました。演劇活動では地域において名作上演や市民の指導に当たり、昨年は糸操り人形・結城一糸さん主宰の一糸座公演「カリガリ博士」の演出を担当させていただきました。



後半から八十年代前半に活動していた

「誰でも楽しめる敷居の低い演劇」を掲げ年2回ペースで公演。既成の脚本、特に古典を得意としている。主な演出作品は『十二夜』（作：シェイクスピア）、「桜の園」（作：チェーホフ）、「招待されなかった客」（作：別役実）等だが、演出作品は数知れず。そして今も週3回で透析中。

角直之 (すみなおゆき)

1994年生まれ、島根県出身。現在は東京藝術大学音楽学部楽理科4年次に在学、NPO法人日本ルーマニア音楽協会や空間創造Otoでコンサートの企画・制作を行っている。これまでに、コンヴィチユニー・オペラ・アカデミーin琵琶湖2014の演出部門を受講。2015年、山梨県で行われた同大学院北川原研究室主催「生命力の踊り場voice」の音楽祭「音楽監督。同大学奏楽堂にて、E年オペラ2015モーツァルト『魔笛』を演出。2017年3月23日には、彩の国さいたま芸術劇場大ホールにてCameraata Project主催「ブッチーニ『ラ・ボエーム』を演出予定。協会主催のセミナーや会員の方々との交流は、自分にとってとても刺激的です。今後も協会



演劇プロデュースやイベント企画・運営など

こたのぼる



東京都出身。10歳の時、劇団文化座の公演に

子役として出演、それをきっかけに演劇の世界に入る。その後、元青年劇場の大多和勇氏に師事。高校卒業後、劇団211に入団するも20歳で持病が悪化、人工透析となるが退団後も社会人として演劇に携わり続ける。2009年に劇団「遊劇社ねこ印工務店」を立ち上げ、現在は下北沢に拠点を移し



1994年生まれ、島根県出身。現在は

での様々な経験を積極的に吸収していきたいと思います。

須川弥香 (すがわみか)



おでこ
主宰・俳優歴 30
年。舞台芸術学

院、伊藤正次演劇研究所を経て、2010年おでこ始動以来、全作品の構成・演出・出演。小泉八雲、古事記、太宰治の短編小説などから劇化。2013年から3年連続岸田國士戯曲に取り組み。2015年、3本の一幕劇と評論日本人奇形説などで構成した「岸田國士の思索」。自身、俳優としてのテーマは「硬直せず、揺らぎ続ける心身からの表現、空間認知力、ひらめきと熟考」。2016年7月『火學お七』（リオフェス参加）@こまばアコラ劇場が団体9回目の本公演。2015年、携帯圏外、ノーマイフラインな隠れ里山、京都市京北芦見谷に、野外ステージ造作を開始。2016年8月柿落し。
団体公式サイト odedoko.com

中原和樹 (なかはらかずき)



劇団もんも
ちプロジェクト
クト主宰・
演出。山梨
県立県民

文化ホールアーティストティックアドバイザー。劇団では生演奏オリジナルミュージカルの脚本・演出をはじめ、不条理劇や時代劇、コメディ、ウエルメイド等、ジャンルを問わず作品創りを行っている。複数の表現を調和として、文学や邦楽、コンテンポラリーダンス、演劇、美術などのコラボレーションを追求している。外部では、子どもミュージカルの演出・演技指導、障がい者向けダンスイベントの構成演出、オペラ演出、ラジオドラマへの脚本提供、俳優向けの定期的WSなども行う。演出『真田風雲録』『近代能楽集』『コシファントウツテ』『歌わせたい男たち』『魔女ものがたり』等。

倉田淳 (くらたじゅん)



スタジオ
ライフ所
属。演劇
集団「円」
研究所第

一期生。演出を故芥川比呂志氏に師事。1981年に氏が亡くなった後、円を辞し1985年に故河内喜一郎と共にスタジオライフを旗揚げしました。演出作品として萩尾望都『トーマの心臓』、皆川博子『死の泉』、東野圭吾『白夜行』、スーザン・ケイ『ファントム』等、文学作品や漫画の舞台化を多く行っています。戯曲演出としては

ミシェル・マルク・ブシャル『リリース』、シエイクスピア『夏の夜の夢』『十二夜』『じゃじゃ馬ならし』等。また「海外の小劇場で生まれた傑作を東京の舞台へ」というコンセプトのもとに「ジ・アザー・ライフ」という別ユニットの活動も続けています。

西尾佳織 (にしおかおり)



2007
年に鳥公
園という
劇団をつ
くり、以

来、劇作・演出を行っています。太田省吾さんに強く影響を受けていて、2016年の秋に太田さんの最後の戯曲『アヤルシ』を瀬戸内の豊島で上演します。自分がどういう歴史の流れの上にいるのか、他者と世界との関わりの中で作品をつくることを考えられるようになったのが、ようやくと最近という未熟者です。「どんな作品をつくっているの?」と訊かれると、いつも答えに困ります。肯定形で語ることは難しい。否定形を否定するような形でしか語れないことに、向き合っているのだと思います。まず目標を設定して、それをいかに上手に達成するか、というやり方に抗う生き方が、私にとっての創作の意味です。

宮崎肇 (みやざきはじめ)



1985
年生まれ。
茨城県出身。事務
所所属中。

映像と舞台の世界を経験し、舞台では演出助手や殺陣の振り付け、舞台セットの立て込み等制作・演出サイドにも携わりました。学生時代からモノづくりや表現することが好きで、イラスト活動やバンド活動、造形物の展示活動など、様々な経験をしてきました。これまでの経験を活かして、これから多くの人に、自分が大切だと思ふことを芝居を通して発信していきたいです。演出した代表作、ひの新選組祭り殺陣パフォーマンズ『池田屋事件』(2016)。

菅澤晃 (すがさわこう)



27年前に
演劇を
始めまし
た。当時
は色々な

ジャンルの演劇を観ましたが、私はリアリズム演劇に興味を持ち、劇団京に入団。14年前からスタジオラフスキーシステムに基づいた俳優芸術と真実の創造について研究しトレーニングをしています。私は演出家として、俳優にスタジオラフスキーが求める真実の心理

と感情を要求します。役として演技で生きるのではなく、その俳優自身が本当に舞台上で生きる事です。俳優が役の心理を的確に感じ取り真実の感情が溢れた時、俳優の潜在意識が開き、劇場にはクリスタルのエネルギーが放射され、空間は独特の空気と雰囲気になります。その創造エネルギーは人間の心を癒し、人間に本当に必要な事は何だろうか? 等、本質に気付かせてくれます。私はそういうエネルギー放射の演劇がとても好きで、俳優の潜在意識が開かれる作品になるように演出を続けています。一つの時代も科学と技術の発展は素晴らしい反面、人間に最も必要な事が忘れ去られる懸念がありますから、演劇芸術を通して人間が持つ潜在意識が開かれていく事を願っています。

退会・訃報

退会

- 鈴木新平 上野健一 大原蛸 渡辺恒久
- 岡部耕大 田辺晴通 加倉幸治
- 丹羽文夫 谷邊康弘 北川伸 志岐武志
- 矢野靖人 福原麻衣 山内勉 明神慈
- 吉田健悟 高木黎 木崎裕次 寺崎裕則
- 保木本佳子 鈴木真理子 真田慎
- 池田一臣 岡本善裕 北村魚 肝付兼太
- 太田哲則 藤沢薫

訃報

- 山本一郎 杉山健 高瀬久男 堀口始



データに見る 協会誌『D』を振り返る

協会誌創刊の覚悟

篠崎光正

日本演出者協会の悩みのひとつは少ない会員数(約600名)である。協会誌『D』創刊前までは事務局長のご努力で、会や会員の動向を伝えるのがきや手紙などが会員の手元に送られて来ることが多かった。20年以上あまり変化が無かったように思える(担当者のご努力に感謝)。9年前理事に選ばれたことがきっかけになって、協会の広報に改革を試みた。試みたというより覚悟したというのが正しいかもしれない。それまでの会や会員の動向を伝えるという同好会的方向から、協会が社会への責任を果たす公開広報、要するに会員から会員への内向き広報から、協会から社会へという外向き広報という方向へ転換した。理事会で承認を受け、会員以外にも向けた協会誌とホームページの計画を広報部で検討に入った。協会誌は会員以外の読者が手にとって読んでみたい冊子にするため、対談を目玉に裏表紙に資料価値の高いデータをわかりやすく掲載するなど、徹底した冊子づくりを計画した。協会誌1冊で協会の略式事業

報告書の役目を果たし、最小限の記録を掲載する永久保存版として増ページなどをせずに公共施設に保存可能な体裁(A4版20ページ)とした。さらに公共の図書館にも受け入れてもらえるように、発行期日を定期(5月1日・11月1日発行)にして小予算で100倍の閲覧者数(図書館の開架の冊子閲覧棚では1冊を約100人が閲覧)を考えた。2000冊発行で20万冊分に相当することを計画した。協会誌は「過去の記録」、ホームページは「現在および未来の予告と大容量のデータ保存」の2本立てとなった。さて、こうして始まった協会誌作りは、協会誌の命名で早くも大きな壁にぶつかった。というのは、協会に対する思いが会員それぞれ異なるため、難渋した。その時浮かんできたのが『D』。演出の意味を持ち、さらに『D』の頭文字を持つ単語がいろいろと挙がり、それぞれの思いをひとつにまとめることが出来た。ここまで思わぬ時間がかかったが、名前が決まったことで、広報部員も理事もイメージが具体的に広がり始めた。これでスムーズに行くかと思われたが、一文字の名前にしたこととで、その文字の形をどのように表現するかで議論沸騰し、部長としては困難の3か月となってしまった。そこでやっと思いついたのが、新劇の父と言われた師千田是也氏の父である。千田是也氏の文字を使え

ば、この協会の創設の思いもそこに込められるのではと提案した。これが功を奏して全会一致で決まり、早速千田是也氏のご家族に交渉を開始したが、すでに他界されている為、予想していなかった複雑な権利関係対応に追われる結果となった。伊藤家(千田氏)、劇団俳優座、早稲田大学演劇博物館(千田是也氏関係資料所蔵)にお願いが上がった。その結果、千田是也氏直筆の文字を論文から探し出すことが出来、ここでやっとして協会誌『D』の誌名が完了。そこから目玉の対談「坂東玉三郎×戌井市郎」の交渉に入った。広報部の皮算用で故戌井市郎氏にお願いすればなんとかなると思っていたが、松竹から広報部長である私のところに断りの連絡が来た。すぐ戌井市郎氏と相談をして友人の松竹重役に会いそこでやっとして認めていただいた。また、それだけでなく、坂東玉三郎氏のお口添えで建て直しが決まった旧歌舞伎座の貴賓室を対談の会場に使わせていただくことが出来た。広報部の強引な計画だったが、現実には難攻不落の城を攻めるような今でもぞっとするような船出だった。一方広報部員の企画のアンケートやデータのページが次々に編集され、その編集作業で一喜一憂した部員の盛り上がりは今も鮮明に思い出される。その後、順調に作業が進み、広報部員の渾身の協会誌『D』創刊号が発行された。

広報部員紹介

『D』は私たちが作っています！

本演出者協会の広報部員は、全員が演出家であり協会員です。部会では、『D』発行のための具体的な話し合いを中心に、業界全体の話題や、各自が現場で感じていることなど、様々な話題が飛び交っています。



篠崎光正 演劇人口の激減に演出家の力を、協会が観客を育成していく事業を。



秋葉由美子 世代の違う演出家との交流、全国各地の演劇人との交流に刺激を頂いています！



篠本賢一 ネット社会で体と体が向き合い対話することの重要性を見直したい。



桑原秀一 自称、広報部の盛り上げ隊長、協会員の繋がりが増していく様に、これからも頑張ります！



緑川憲仁 日本演出者協会の挑戦と試行錯誤をぎゅぎゅっと凝縮したような広報部！



三谷麻里子 誌面を作っているとあちこちで仲間が色んな活動をしているとわかるので心強いです。



期待の新部員！
藤間健 皆様にホットな情報をお届けできるよう頑張ります。

広報部員募集中！

興味のある方は、
協会事務局までお問い合わせください。

創刊号 2008年11月



『足場のない演劇』
成井市郎 × 坂東玉三郎
/ アンケート「稽古初日までの準備」
「キャストイング」読み合わせにかけ
る日数 / データで見る演出者協会（都
道府県別会員数、喫煙率、協会男女比）

第2号 2009年5月



『知的な作業のスリル』
市原悦子 × 宮田慶子
/ アンケート「ダメだしについて」
演出家の立場について / 第一回日韓演
劇フェスティバル（報告記事と写真）

日本演出者協会の協会誌として、2008年に産声を上げた『D』。創刊当時から今日まで、対談やアンケートなどの企画を通して、現場の「生の声」を伝えるのと同時に、協会の様々な事業を報告するアーカイブとしての役割も果たしてきました。スペシャル号を記念して、これまでの協会誌『D』を振り返りたいと思います。

※『D』のバックナンバーをご覧になりたい方は、協会事務局までお問い合わせください。バックナンバーの一部は、協会ホームページ「ライブラリ」でもご覧いただけます。

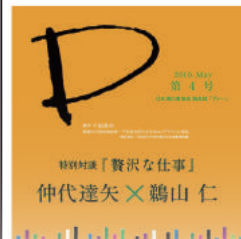
データに見る 「協会誌『D』を 振り返る」

第3号 2009年11月



『劇場のある国へ』
野田秀樹 × 篠崎光正
/ アンケート「私の一冊」
「演出する時に実際に演ってみせることはありますか？」
/ データで見る演出者協会（上演台本の傾向についてのアンケート）

第4号 2010年5月



『贅沢な仕事』
仲代達矢 × 鶴山仁
/ アンケート「演出を始めたきっかけ」
「演出者じゃなかったらやりたいことは？」
/ データで見る演出者協会（在住地別協会会員数、協会員年齢分布など）

第5号 2010年11月



『劇場法、迫る！』
平田オリザ
/ アンケート「カーテンコールについて思うこと」
/ 日本演出者協会50年を振り返る ふじたあさや

第6号 2011年5月



※ホームページ映像対談
『震災と演劇』西川信廣 × 和田喜夫
/ アンケート データで見る地震対応
（東日本大震災による東京の小劇場公演
の上演・中止について）

第6号号外 2011年5月



『東日本大震災2011.3.11』
いま、なにができるか。
いま、わたしがおもうこと。

第7号 2011年11月



『演出家と劇場』
鴻上尚史 × ベーター・ゲスナー
/ アンケート「無条件で劇場を建てられ
るとしたら」「日本演出者協会の一番大
きな役割とは？」

第8号 2012年5月



『演出は五線譜の上に』
松本重孝 × 山田和也
/ アンケート「これからの俳優
たちに特に勉強しておいて欲しいこ
と」「自分専用の稽古場を持たず
して、いちばん欲しい機能・アイテム」
/ データで見る『D』の題材（創刊5周年、
これまでの対談リスト）

第9号 2012年11月



『劇団で食うために。』
成井豊 × 横内謙介
/ アンケート「教育の中の演劇」
/ データに見る「演劇大学開催地」

第10号 2013年5月



『三流の芝居をつくらう。』
福田善之 × 永井愛
/ アンケート「震災を意識して活動して
きたこと、周囲で感じる変化」
/ データに見る「国際演劇交流セミナーの歴史」

第11号 2013年11月



『俳優の育て方、とは言っても』
坂手洋二 × 篠崎光正
/ アンケート「創作の現場や日常生活
における「世代差」への意識」
/ データに見る「日本の演劇祭—最近
の主な国内演劇祭—」

第12号 2014年5月



『ニュアンスの「わかってもらいたい方」』
風蘭 × 青井陽治
/ アンケート「あなたの考える演出の役
割とは？」
/ データに見る「日本の近代
戯曲研修セミナー」をふりかえる

第13号 2014年11月



『タイプの違う作家ですからね、僕たち。』
鄭義信 × 鐘下辰男
/ アンケート「あなたの考えるアドリブ
台詞の使い方は？」
/ データに見る「全
日本歴史ある芝居小屋」

第14号 2015年5月



『変わり続ける自分は好きだね』
ふじたあさや × 大和田伸也
/ アンケート「あなたの期待するオリ
ンピック開閉会式の演出とは？」
/ データに見る「近年閉館の劇場（関東）」

編集後記

▼部長になって初めての編集作業はわからないことも多く、手探りの日々。先輩方に教えていただきながら、やっと発行日を迎えることができました。感謝！
（秋葉由美子）

▼演出者協会が「演出者」という言葉でこの協会のスタンスを表現したことは、時代の先取りだと思っていた。しかし長年編集作業をしていてと演出をする（舞台以外も含めて）あらゆる人という枠組みこそ現代にマッチした広報のターゲットだと考えるようになった。
（篠崎光正）

▼世の中で自分が少数派に属すると感じる事が多くなってきた。こんなときこそ思考を研ぎ澄まし歴史的な視点をもちつことが必要だ。演劇はそれを可能にしてくれる。
（篠本賢一）

▼年に2回の作業を予定にどう組み込むかということになかなか慣れないまま何年も経ってしまった印象です。先日タスク管理のセミナーに行きました。（三谷麻里子）

▼スペシャル号は内容・ボリュームがスペシャルなら、当然のことながら編集作業もスペシャルでした……。
（緑川憲仁）

▼新しいスタートとなりました。種を蒔いてくださった先輩方に、改めて感謝の思いです。（乗原秀二）